

洛陽出土伝世品青銅器研究（一）

竹内 康 浩

目次

はじめに

- 一 従来の研究とその問題点、及び本稿の方法
- 二 洛陽出土伝世品青銅器の集成に際しての留意点
- 三 「洛陽出土」伝世品青銅器の集成
 - a 単に洛陽出土というもの
 - b 洛陽近郊というもの
 - c 近年の洛陽出土というもの
 - d 出土年を明らかにしているもの
 - e さらに詳細な出土地点をいうもの
 - f 他の器との関連情報を持つもの
 - g 異説のあるもの
- 四 洛陽出土伝世品青銅器に関する若干の知見

はじめに

目下のところ中国史上実在が確認できる最古の王朝である殷を倒した周族は、「天命を受けた」と称し、王朝を建て支配を始める。紀元前 11 世紀の後半のことであった。そうして建てられた王朝は、紀元前 8 世紀に滅ぶ。我々はこの王朝を西周と呼ぶ。

この西周王朝の時代は、その後の中国史の上で一つのモデルとなる、極めて重要な位置付けをされることとなる。孔子が「郁郁乎として文なるかな」と称え、その完備した制度は『周礼』として儒教の經典となり、西周はまさに理想であり偶像であった。一方、武王による殷の紂王討伐、周公の摂政、といった出来事が、権力篡奪を正当化する先例として持ち出されることもあった。いずれの場合であっても、西周王朝の存在は全く疑いの無いこととされ、信用されて来たのであった。しかし、西周についての記述がよくまとめられた『史記』周本紀を見ても、西周史の内容の無いことは明らかである。克殷の前後に関わる当たりがむしろ最も詳しく、後の王では何らの事蹟も記されぬものすらある。まことに不審であり、文献のみを見る限り、西周王朝の存在を疑う向きのあったことは、あるいは当然であったかもしれない。だが、地下からの出土資料、主に金文によるならば、西周王朝の存在そのものは全く疑いが無いことであり、さまざまな角度から研究が進展しつつあるのが現状である。

とはいえ、すべてが順調というわけではない、と私は考える。西周王朝の像は、後世の文献資料の中では肥大化され歪められひいては捏造されている部分が多い。このことにはそれほど異論はないと思う。にもかかわらず、従来の西周王朝研究は、そうした文献資料中の西周王朝像をベースとし、出土資料からの知識をそれにかからめてゆく、という手法が多かった。しかし、果たしてそれでよいものであろうか。出土資料と文献資料とで異なる像を描いている時、どのような基準・方法でその違いを解釈するのであろうか。両者の像をすりよせていくことそれ自体が正しいと言えるのであろうか。要は、出土資料は出土資料として、まずそこに示される世界を把握すること、まずその作業がなされねばならないと私は考えるのである。正しい意味では、文献資料は出土資料の内容的な隙間を埋めるものではないはずである。

こうした方法上の認識を踏まえた上で、西周王朝の歴史を考察しようとする際、ここで私が注目し取り組もうとするのは、西周王朝にとっての成周の意味、

という問題である。克殷後、周は、その支配の便のため成周を現在の洛陽に建設する。例えば、文献に言う牧野の戦などは、要は一回の戦闘であり、悪く言えばさしたる勝算もないままに戦いを挑み、まぐれで周が勝ってしまったという状況も想定し得る。しかし、成周建設は、そうした単なる偶然性を越えた意味を持つ、積極的な意志的行為である。単なる殷王朝討滅を越えた政治意志、今後自分らがなさねばならぬことへの自覚は、この成周の建設とその後の維持に明確に示されるはずである。それ故、成周について検討することは西周王朝の実態を知る上で極めて重要な意味を持つと考えるのである。

この問題については、冒頭に述べたように、以下、出土資料を中心に検討する。周知のように、成周建設のことを記した文献資料として『尚書』召誥・洛誥があり、それらは『尚書』中でも特に古い成立に属すると考えられ、資料として有効であることは言を俟たない。但し、上に述べたように、まずは後世の潤色を經ていない出土資料を以て当該時代のそのままの状況について知らねばならない。ここに言う出土資料とは具体的には青銅器であり⁽¹⁾、成周研究のための資料となる青銅器には二種ある。一は成周の範囲から出土した青銅器である。二はその銘文中に於いて成周に言及する青銅器である。私の今後の成周研究は、その両者について検討を加えていくことが主な作業となる。まず最初に、前者、即ち、成周（洛陽）から出土した（出土したとされる）青銅器を対象とする。それらを集め、検討を加えることで、西周王朝期における成周の果たした機能、その歴史的意味についての考察を試みるものである。ここで問題となる出土地点に関する情報については、その信頼性が最も重要な問題であるので、いわゆる伝世品と、特に解放後に科学的考古学的発掘によって得られた新出器との、二つに区別して考えなければならない。洛陽出土青銅器にもその両方があり、いずれも多数存在する。当然、その両者を対象として検討してゆくこととなるが、まず最初に、本稿は、伝世品を対象として関係資料を集成し、検討を加えてみようとするものである。青銅器を歴史資料として用い

際には、当然その来歴についての検討（資料批判）を経なければならない。以下の記述に明らかなように、伝世品について検討を加えることは地味でしかも困難の多い作業である。多くの紙幅を費やしながら、これはテーマのまだほんの入り口にかかったばかりの予備的な作業に過ぎない。

- 1 ここに言う青銅器は、通常用例に従い、宗廟などでの祭祀に用いるいわゆる彝器を指している。従って、武器の類、さらには馬車の部品などは本稿が取り上げる対象とはならない。それらの器と彝器とでは、製造にかかわる困難からその有する意味に至るまで、明らかに違いがあるからである。

一 従来の研究とその問題点、及び本稿の方法

先に述べたような成周の持つ重大な意味については、勿論既に多くの先学たちが十分に認識しており、例えば『尚書』召誥・洛誥に記される成周建設についての研究は大変多く⁽¹⁾、さらに新出器の何尊の銘文の中に武王が成周建設の意志を述べた部分があることが発見されてからは、それも加えてさらに多くの研究が現れている⁽²⁾。但し、従来の研究は、余りに最初の建設のことだけに関心が傾き過ぎているようにも思われる。成周は決して周初においてのみ意味があったのではない。西周金文には最末期まで成周の名は見えており、西周期全体を通して成周は存在し、機能を果たし続けたのである。その点にもやはり注意すべきであろう。本稿は、先にも述べたように、成周（洛陽）から出土した（出土したとされる）青銅器を集めて検討を加え、西周王朝期における成周の果たした機能、その歴史的意味について考察しようとするものである。殷周時代、青銅器は、誰でもが自由に持つことができたものではなく、特定の状況下においてそれはようやく可能であった。銘文を読むならば、特に西周期に於いては「君臣関係の確認」の場において青銅器の製作は行われていたのだと

ということがわかる。青銅器はステイタス・シンボルであったのであり、まさに銘文に「寶罍彝」と言う如く、それは貴重なる宝であった。洛陽からはこの青銅器が極めて大量に出土しているのであり、そのことは、青銅器を持ち得るほどの階層の人々が当時成周に多数いた、ということを示している。青銅器を通して、そうした人々について考えてみることによって、成周の状況が従来よりもさらに具体的にになると期待されるのである。

洛陽出土伝世品青銅器を集めて検討を加えた研究は、特定の図象銘を持つ器群を対象とした研究などは散見するものの、全体を対象としたものとしては、これまでのところ、張劍・孫新科「洛陽伝世的西周青銅器研究」⁽³⁾が唯一であろう。張・孫の両氏は、洛陽出土とされる伝世品青銅器を集め、まず銘文、特に作器者を基準として三十組に組分けし、それぞれについて器種や収蔵機関を掲げる。また組にならないものとして四十数件も名称だけ掲げる。続いて、各器種ごとに形式分類を試みている。その上で、器形の特徴からは洛陽出土青銅器には少なからず殷人の作風のものが入り混じっていること、洛陽出土青銅器には複雑な技法を駆使した水準の高いものが少なくないこと、洛陽出土青銅器には西周史を考えるうえで重要な内容の銘文を持つものが多いこと、を指摘している。類例のない貴重な研究であり、両氏の労は多として評価せねばならない。とはいえ、遺憾ながら、実のところ不満も多数抱かざるを得ない。

両氏の研究に対する最大の（かつ根本的な）不満は、「洛陽出土」というデータが充分なる吟味を経ていないと見られることである。例として珣生殷二件を挙げておこう。かつては召伯虎殷とも呼ばれたこの器は、五年の紀年を持つ器（五年器）と六年の紀年を持つ器（六年器）とがあり、一連の事件を記しつつも銘文は二件の器に分載されている珍しい例である。現在五年器はアメリカ、イェール大学博物館の収蔵、六年器は北京の中国歴史博物館の収蔵になる。これら二件について、両氏は洛陽出土として検討対象にしているのである。しかし、二件とも、古い著録には出土について明言する記事はなく、六年器につい

ては近年『中国美術全集 工芸美術編4 青銅器(上)』に「伝陝西出土」とのデータが出ていて、これも不審ではある(『殷周金文集成』はこのデータを無視している)けれども、「洛陽出土」と言うものはない。五年器については、『攷古録』巻三の十八葉に「見洛陽市中、後帰山西馬氏。」とあり、それ以外に珣生殷と洛陽とを結び付ける材料はないので、張・孫両氏はあるいはこれに基づいて珣生殷を洛陽出土とみなしたと考えられる。もしそうだとすると、そもそも『攷古録』の記載は珣生殷が洛陽出土であるという意味になるのであろうか。『攷古録』の書き方に注意しつつ、「見」の意味について考えると、次のようになる。『攷古録』に於いて、「見于某」と言う場合、「又百丁彝 丁酉見于京師。」(巻一一二)「幼衣斧 見于京師。」(巻一一十六)のような例が、京師(この場合は北京)出土を意味することはあり得ても、「芮伯敦 見于杭州。」(巻二一五十)が杭州出土を意味するとは常識的にはあり得ない。また、「見某市中」と言う場合、「陸册卣 見于長安」(巻一一四十)が長安出土を意味することはあり得ても、「垂乙爵 見于呉市」(巻一一二十一)「立戈祖戊爵 見于呉市」(巻一一二十二)の例でこれらの器が呉(蘇州府)出土ということは考えられない。殷周青銅器の出土地点についての現在での一般的常識から考えるならば、このように考えざるを得ないのである。「見某市中」とは、「史頌簠 見于長安市。福建閩県陳子良承襲購得之。」(巻一一六十一)の例でわかるように、市とは実は骨董商を指すものに相違ない。そもそも『攷古録』では出土の場合には、「季保敦 山東諸城劉氏藏、伝易州所出。」(巻一一五十九)「周窰匱 山東濰県陳氏藏。青州所出。」(巻二一二十三)「大豊敦 出関中。」(巻三一十二)「孟鼎(=大孟鼎) 器出岐山礼邨。」(巻三一二十六)「孟鼎(=小孟鼎) 器出陝西岐山県。」(巻三一二十八)のように、「出」「出土」と明言しているのである。従って、張・孫両氏が『攷古録』の「見洛陽市中」を「出土」の意味と解したのであればそれは正しくないと考えられる(なお、近年、召伯虎の作器になる盨が洛陽東郊邨山南麓の墓葬から出土しているけれども、だからと

て、伝世の召伯虎殷（珣生殷）までもが洛陽出土ということにはならない。洛陽市文物工作隊「洛陽東郊C5M906号西周墓」『考古』1995年第9期）。他にも充分な吟味を経ていないと思われる例が幾つかあり、この問題については、洛陽から出土したということが何よりも重要な点なのであるから、データの確認にはさらに慎重でありたい。不満の第二は、紙幅の都合もあろうけれども、各器の著録が示されていないことで、詳細不明の器がいくつもある⁽⁴⁾。他、単純なカウントミスもある⁽⁵⁾。このように、避けられる欠点があることが惜しまれるのである。

本稿は、こうしたことに鑑み、洛陽出土というデータを持つ器を集成するに際して、まず、洛陽出土というデータの詳細度を基準として各器を分類していく。その上で、それらのデータの信頼性について検討する。著録に言うところを盲信せず、その信頼性についてあらためて考えてみようとするのである。まず何よりも、洛陽出土青銅器を確定すること、これが重要である。

さて、確認しておかねばならないのは、ここに言う洛陽の範囲はいったいどれほどのものであるのか、ということである。本稿も含め、私の今後の一連の研究の目的とするところは、西周時代の成周の実態を探ることにある。それ故に、ここまで「洛陽」と表してきたところの指し示すものは、実は西周時代に建設された成周のことである（都城としての成周に付属する墓地なども含んで考える）。この周辺の発掘は大いに進んでいるとはいえ、西周成周の範囲は、勿論確定されていない。この肝腎な問題について明確な基準を持ち得ないことは大変遺憾であるけれども、とりあえず、以下のように考えておく。即ち、『尚書』洛誥に周公の言として「我、乃ち澗水の東・灋水の西をトせしに、惟れ洛食す。我、また灋水の東をトせしに、亦た惟れ洛食す。」とあり、成周建設に当たって地を選ぶ際、周公が占ったところ、「澗水の東・灋水の西」が吉と出、さらに占ったところ「灋水の東」も吉と出たという。成周の場所はこれを受けて決められたのであり、したがって、その西は澗水までであることはま

ず認めてよい。東については灋水の東岸のどのあたりまでかということが問題となる。その判断は困難ながら、『尚書』の記述よりすれば、成周の場所の中心はやはり「澗水の東・灋水の西」にあると見るべく、それが「灋水の東」にも及ぶというのであるから、それは決して灋水の東岸から著しく東へ延長されるものではあるまい。現在の地名で言えば、白馬寺にまでは及ばないと思う。近年の発掘と合わせると、北の邙山馬坡から南の塔東・塔西を結ぶ線がほぼ成周の東の境界と見ておいて大過ないものとする。そして南は洛水の北岸までを見当としておく。従って、孟津の出土とされる器はここでは取り扱わないこととなる⁽⁶⁾。

- 1 それらの論文は数が多く、一つ一つここでは挙げるわけにはいかないで、とりあえず、『西周史研究』（人文雑誌叢刊第二号，1984年）巻末の「西周史研究論著目録索引」、張劍氏の編になる『洛陽歴史考古文献目録（1900—1990）』（中州古籍出版社，1992年）などの関係部分を参照されたい。なお、あらためて詳細な文献目録を示す予定である。
- 2 比較的最近の日本語で読める論文を二つほど掲げておく。
伊藤道治「西周王朝と雒邑」（伊藤氏『中国古代国家の支配構造』中央公論社，1987年，の附論三）
李学勤（林洋美・石黒ひさ子訳）「成周建設論 —〈何尊〉の銘文を中心として—」（五井直弘編『中国の古代都市』汲古書院，1995年）
- 3 河南省文物考古学会編『河南文物考古論集』河南人民出版社，1996年，に収む。
- 4 張・孫「洛陽伝世的西周青銅器研究」337頁に名前だけ掲げてある器の中に、古く『金文分域編』に「未著録」として名前だけ挙げられた器がいくつもある（虎卣・四册爵・六星形斝など）。銘文について摹も拓もなく、器影もないのでは考察の対象とすることは到底できない。
- 5 331頁から336頁までに掲げた三十組の数に、合わないものがある（例えば336頁の第二十七組は15件としているものの、17件ある）。
- 6 洛陽の遺跡の範囲について持井康孝氏は東と南についてさらに広げて考えているけれども、本稿ではもっと限定して考える（持井「西周時代の成周鑄銅工房について」松丸道雄編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会，1980年，に収む）。概

ね、楊寛氏や飯島武次氏の見るところに従うことになる（楊 [尾形・高木訳] 『中国都城の起源と発展』学生社、1987年。飯島『中国周文化考古学研究』同成社、1998年）。

二 洛陽出土伝世品青銅器の集成に際しての留意点

洛陽出土伝世品青銅器については、先に掲げた張・孫両氏の研究があり、両氏は洛陽出土とされる青銅器を集め（300件以上あると言う）、まず銘文、特に作器者を基準として三十組に組分けし、また組をなさないもの四十数件も名称だけ掲げる。両氏ほど全面的ではないにしろ、他に、1929年馬坡からの一括出土の器群を集成した研究もあり⁽¹⁾、そこでも銘文特に作器者や被葬者を指標にした分類が行われている。但し、そうした方法は実は目的を些かはみ出し、その器自身は洛陽出土というデータを持たなくても、同銘器に洛陽出土とされるものがあるため、データを持たない器までもが洛陽出土器の中に取り込まれてしまうこととなっている（実は張・孫両氏の研究においてもそれが見受けられる）。それはやはり適切ではないと思うので、ここではそういう方法は採らない。まずは、あくまでもその器自身に洛陽出土というデータがあるものを集成してみる。全てはそこから始まると思うのである。同銘器群の集成は、その次なる段階の作業としてなされるべきであろうと思う（従って、本稿の結果を承けて、それは次稿以下の課題となる）。

伝世品青銅器で出土データが残されている例は実は多いとは言えない。宋代以来の金文学の伝統の中で、殊に銘文のみに関心が持たれ、器にさほど（あるいは全然）関心が持たれなかったことは珍しくない。従って、これから洛陽出土とされる青銅器を集めてゆくけれども、洛陽出土青銅器を全て網羅することは実は不可能である、ということになる。但し、幸か不幸か、洛陽から青銅器が発見される例は、今世紀、それも1920年代以降に急に目立ち、それらは直

ちに著録に載せられることが多かったため、かなりの部分を拾い上げることが可能である、ということもまた言い得るのである。おおよその傾向を確かめることは十分に可能であるとの見通しのもとに、検討を進めることに問題はないと考える。

伝世品青銅器の出土データを各著録で調べてゆくならば、出土データは、地点と出土年代に関し、その詳しさにおいていくつかのレベルに分けることができる。即ち、地点については、ただ単に「洛陽出土」とだけ言うもの、「洛陽某地出土」というように洛陽の中でもさらに特定地点の名を具体的に言うもの、の二レベルがある。それを踏まえ、さらに出土の時期については、特に何も言わないもの、「近年洛陽出土」とだけ言うもの、「某年洛陽出土」というように時間がさらに具体的になるもの、の三レベルがある。地点と時間、まずはこれが基本となる。なお、加えて、他の器と同出であるというデータが残り、その器が洛陽出土というデータをもつ、という言わば関連情報によって洛陽出土であることがわかるものもある。こうしたいくつかのレベルが、ある場合には組み合わされた形で著録に示されるのである。本稿は、こうしたレベルの違いによって分類を試みるものである。それは、データの具体性ということがその信頼性と密接に関係する、と考えるからである。

また、出土データがいつ頃に示されているかも考慮を要する点である。即ち、例えば、初出著録に出土データが記されている場合と、初出著録以来長期間出土データが示されず最近になって突然出土データが現れた場合とでは、やはりその信頼性に違いがあると思われるのである。一般論としては前者の方が信頼性は高いと言えようが、それがあやふやな場合もあるし、後者の場合にも慎重なる調査の結果判明したということもあり得るし、どちらがより信頼できるかについては必ずしも一概に決定はできない。また、著録の体裁上、初出著録に出土データを掲載することが不可能であった場合もある（金文著録としては極めて浩瀚でかつ質の高さで有名な『三代吉金文存』が実はこの典型である）。

そうした意味からも、本稿が念頭に置いて重視するのは、実は、初出著録ということではなく、出土データが記された著録が、器が出土したと推される時期にどれほど近い（遠い）時期の著作（刊行）であるのか、ということである。あらゆる場合を想定しつつ、要は、出土データがいつ頃どういう著録に現れるかということに注意を払わなければならない。この点は、当該器に関する出土情報が信頼し得るかどうかの判断の基準として、以下、検討の対象とされる。従来の研究が充分に行ってこなかったのが実はこの点である。

青銅器は、それが骨董商によって高価に取引されたことから、偽器が大量に作られたことに注意を払わないわけにはいかない。中には、本来器は存在せず、銘文の拓だけが偽作されたというケースもあり得よう。また、売買の際に、商品価値を高めるため等の理由で、出土地点について何らかの情報操作が行われたことも、特別怪しむには足りない。このように、骨董商が扱った伝世品については、データについて改めての検証が必要である。さらに、これまでの研究が往々にして採ってきた方法、即ち、洛陽出土とされる器が一件あれば、その同銘器をも（データがなくても）洛陽出土としてしまう方法は、最近のいくつかの発掘例から言えば実は問題がある。榮伯鬲⁽²⁾・不嬰鬲⁽³⁾の例、あるいは遼寧と四川から出土した鬲⁽⁴⁾の例からすれば、銘文・紋様・サイズが同じないし酷似している器であっても、違う地点から出土することがあることがわかったからである。それ故に、本稿は、まず当該器に関する出土情報があるものを対象としようとするのである。

以上を踏まえ、これからの検討で、該当する青銅器が初めに掲載された著録は何であるか、そして出土データはどの著録に載せられているか、その点について常に注意を払いながら「洛陽出土」という根本のところを確認しようとするものである。黒か白かという形での明白な判定は勿論できない。しかし、疑わしいものについて保留をつけることはできる。そうして極力妥当と思われる判断をしていきたいと考える。

- 1 郭沫若「令彝令殷与其它諸器物之綜合研究」(郭『殷周青銅器銘文研究』1931年)がその典型例である。また、陳夢家(松丸道雄改編)『殷周青銅器分類図録』(汲古書院、1977年。オリジナル1961年)のA 331 R 305(土上盃)の説明部分においても関連器を集成して詳細な言及がある。最近の研究では、曹叔琴「臣辰諸器及其相關問題」(『考古学報』1995年第1期)がある。
- 2 1973年に陝西省岐山県賀家村から「栄有銅再作彝鼎用朕羸韞母。」なる銘文を持った鼎が出土している。その二年後、1975年に陝西省岐山県董家村から出土した多数の青銅器の中に、「栄有銅再作彝鬲用朕羸韞母。」なる銘文を持った鬲があった。器種に合わせて「鼎」と言い「鬲」と言う部分が違うだけで、あとは全く同じ銘文であり、また同じ環帯紋を持つ器で、関連は明らかである(龐懷清等「陝西省岐山県董家村西周銅器窖穴発掘簡報」『文物』1976年第5期。陝西省博物館等「陝西岐山賀家村西周墓葬」『考古』1976年第1期)。但し、別地点とはいえ、距離的には近接している。
- 3 不嬰殷は、長い銘文を持つ殷蓋だけが伝世品の内に知られており、それは出土に関するデータを欠くものであった。ところが1980年、山東省滕県后荆溝の墓葬から、伝世品と全く同じ銘文を持つ不嬰殷の器身が発見された。墓葬は破壊されていたが、盗掘による擾乱の跡はないとのことであり、これら不嬰殷の蓋と器身とが古くから離れ離れであったことは明らかである。この件については、竹内康浩「西周中期以降における青銅器製作の背景」『東京大学東洋文化研究所紀要』第125冊、1994年、を参照のこと。
- 4 四川省彭県竹瓦街から出土した曇と遼寧省喀左県から出土した曇が、サイズの違いなど部分的な相違点はあるながら、全体的に極めてよく似ていることはしばしば指摘されるところである(両方をともに載せている著録は少ない。ここでは、国家文物局主編『中国文物精華大辞典 青銅卷』上海辞書出版社・商務印書館(香港)、1995年、を挙げておく)。

三 「洛陽出土」伝世品青銅器集成

以下、何らかの形で「洛陽出土」というデータを持つ伝世品青銅器を集め、まずデータについて吟味することから始めたい。その過程に於いて、いくつか

の器については、そのデータは疑わしく信頼できない、との判断が下されることもある。しかしそれは、対象を限定していく中で当然起こり得ることであり、たとえそこで出土データを否定される器が多数に上ろうとも、仕方のないことである。

何らかの形で「洛陽出土」というデータを持つ伝世品青銅器を全て集めて並べたものが表1である⁽¹⁾。前述のように、ここでは初出の際の出土データについて、そこに記される地点・時期などの詳細さのレベルの違いによって、

- a 単に洛陽出土というもの
- b 洛陽近郊というもの
- c 近年の洛陽出土というもの
- d 出土年を明らかにしているもの
- e さらに詳細な出土地点をいうもの
- f 他の器との関連情報を持つもの

の六つに分類する。単に「洛陽出土」とだけ情報が残るものから始まり、出土の年代や具体的な地点がより詳しく知られるものまで、この六レベルに分け、そのレベルに従って器を配列する。a～f各レベルの中に於いては、初出著録の刊行年（ないし成立年）の年代の早いものから順に並べてゆく。そして、同一著録の中では巻葉の前後の順に従って並べてゆく、という方法を原則として採ることとする。従来採られていた、同銘器群をまとめて並べる、という方法は原則として採らない。それは、「洛陽出土」という情報がまさにその器自身について存在するのかどうかを検討するのが本稿の主題なのであるから、当然のこととして了解されよう。但し、「d さらに詳細な出土地点をいうもの」「f 他の器との関連情報を持つもの」については、その出土したという地点あるいは情報源によって関連器をひとまとめにしている。それは、これらの場合には、それらに付けられた出土情報が他の器にも言及することが多く、ひとまとめにしておいた方がのちのち検討が容易になるためである。以上6レベルが本来的

な対象であり、一方に「洛陽出土」との情報を持ちつつ、もう一方に別な場所から出土したという情報を持つ器については、gとしてさらに加えておいた（後述する如く、これらは信頼性が薄いものとして結果的には退けられる）。初出の際に「河南出土」と広い（曖昧な）情報が出され、それから間もなく「洛陽出土」とされた器については、初出の「河南出土」では分類せず、「洛陽出土」の情報が出たところで分類している。また、初出の際にaで、のちにc→d→eと情報が詳しくなる例も多い。しかし、何より問題なのは最も出土に近い時期の情報なのであり、分類はまずそれをもって行うこととし、よって、こういう例はaのところに入れられることとなる。後に付け加えられた情報が必ずしも正しいとばかりは限らないので、その意味からも、こうした処理をまずは採ることとする

表の「字数」の欄は次のように書かれている。数字が書かれているのは文字数である。「図」とあるのはいわゆる図象銘を指し⁽²⁾、その欄に「図」とだけあればその器の銘文は図象銘のみであることになる。「7+図」とあれば、その器の銘文は7字と図象銘から構成されるということになる。また、洛陽からは特定の図象銘が集中的に現れている（あるいは正確に言えば現れたとされている）ので、それらについてはA~Dとして示し、これも検討の便とした。なお、図象銘A・B・Cの構成要素中の側面形人については頭部の描き方に異体があるのでそれらはA'・B'・C'で示した（図1を参照）。

初出著録の欄には、その器が初めて載った著録を略号で示した。それぞれの略号については付載の表を見ていただきたい⁽³⁾。「初出」の意味は、その本に該器の銘文（摹本・拓本を問わない）や器影が示され、要はその器の存在が確認されるような情報を載せる最初と認められるもの、ということである。なお、そこに示されるのは銘文・器影のいずれか一方だけでも差し支えはない。さらには、器が甚だしく破損している場合などには、銘文も器影もなく、説明文中に触れられるのみという場合も実はある。それらも拾い上げ、表の中に入れて

ある（器種欄で*印が付いているのがその例である）。

出土に関する記事の欄は、原則として、出土に関する記事を最初に載せた著録の文を直接引用（“”で囲んだ）することで示した。但し、そういう形で引用することが難しい場合には、意味するところをまとめておいた。a～fの6レベルのいずれに入っているかはまずそれで決まるわけである。さらに詳しい出土情報が後の著録でもたらされた場合には、それをその欄に付け加えておいた。その付け加えられた方で初めて「洛陽出土」との情報が出た場合もある。まずはその器の出土地点がどういう形で示されてきたのか、明らかになってきたのか、そのことを確認しようということである。

表の右端には、該器に関し検索・検討の便のため、『殷周金文集成』及び孫稚離『金文著録簡目』の番号を入れておいた。

該器について検討した結果、洛陽出土との情報に強い疑いが存する場合には「存疑」、信頼できないあるいは誤りと見られる場合には「除外」の語を、表の右端、備考欄に入れてある。以下の本文は、そう判断する根拠を述べたものということになる。

一件一件についてのコメントがこれから続いていくこととなり、それはまことに煩瑣である。また、銘拓や器影を掲げておけば、金文・青銅器研究者には、一見して了解してもらえる器が多く、そうすべきかとも思うけれども、全器の銘拓や器影は、むしろ今回の検討を経て対象が確定してからのの方がよいかとも思い、今回は掲げないこととした。

- 1 勿論、著録に示される「洛陽出土」というデータがあまりにも明白に誤りである場合には表に載せていない。例えば、『殷周金文集成』3861の作父己殷について該書は「伝出洛陽」と記す。この器は、『鄴中片羽第三集』と『商周金文録遺』にのみ著録されており、前者は安陽殷墟出土遺物を載せた本であり、後者の著録は出土地点などのデータを載せない。よって、これら二著からは「洛陽出土」というデータは絶対に出て来ない。『殷周金文集成』が該器について「伝出洛陽」と記すのは、

「伝出安陽」の誤りであるに相違なく、そう判断してこの例は表に入れていない。

ほか、名称だけが伝わり銘文も器影も確認できない器も取り上げない。器の名前だけがわかって何も検討し得ないからである。それ故、『金文分域編（正・続）』に名前だけが見えている器は扱わない。なお、『金文分域続編』が掲げるところには出所不明の不審な情報が多く、記述が極めて疑わしいのでこれも初めから除いた（例えば、貞松統所載の器を二件挙げるけれども、貞松統には洛陽出土を言うものは一件もない。そして柯昌濟はそれ以上の根拠を挙げていないのである）。

- 2 図象銘は一般的には文字として文章中に現れることのない、一見絵画的要素の強いものが多いけれども、用法上からは、文字もその内に含まれる。銘文が1字だけの場合、文字としての意味に解してよいのかはたまた図象銘であるのかの判断は容易にはできない。それは実は銘文が2字の場合にも有り得る。ここではその識別に迷う場合にはひとまず文字として数えてある。
- 3 著録は原則的に刊行年の順である。但し、同年刊行の著録にはその前後を決めたい場合がしばしばある。その際には、だいたい従来示される順に従っておいた。

a 単に洛陽出土というもの

まず最初に、単に洛陽出土というものを集めて検討を加える。ここに分類されるのは、例えば著録に「洛陽出土」「出于洛陽」と記されるものがその典型であり、あるいは最近の刊行になる図録に「出土地：洛陽」となっているような場合もここに含まれる。なお、著録の表現に必要な場合は、その都度、検討を加えていく。

- ・爵（2字） 初出著録：考古図5—10，出土データ：“得於洛陽”（考古図）
- ・爵（1字） 初出著録：考古図5—11，出土データ：“得於洛陽”（考古図）

これら二件については、古く宋代の著録である『考古図』に記載があり、出土データもそこに示されている（なお、ここでは中華書局から1987年に刊行

された『考古図・続考古図・考古図釈文』を使用し、その巻数を示した。他の版本では若干葉数がずれる。『考古図』の「得於洛陽」という表現は、洛陽出土を意味するものと解してよいようである。『考古図』の記載は「右二器得於洛陽。量度未考。一有銘二字，一有銘一字。」というもので、これら二器を並べて一緒に説明を加えている。但し、これら二器が同出であるというのではないらしい。詳細は不明ながら、洛陽に於ける青銅器の出土が宋代にまで溯って確認されることの意味は大きい。

- ・ 貞（65字） 初出著録：長安1—17～8，出土データ：“得之河南”（據古録）“器出洛陽市”（綴遺）

銘文から作器者は效という人物であることがわかり、效貞と呼ばれている器である。初出著録の長安（1840年前後刻）には出土データは見えず、約十年後の『據古録』に「得之河南」と言う。但し、『據古録』の「之を～に得たり」という表現は、必ずしも出土地点を意味するとは限らない。さらに四十年ほど下って綴遺に「器出洛陽市」というデータが記される（集成が“器出洛陽”の出典として『據古録』を掲げるのは誤りである）。先には河南と広がったものがここでは洛陽に狭まっている。綴遺に於ける「出」は、他の用例はいずれも出土の意味と解せられるけれども、ここでは「洛陽市」と言っているのが気になる。明らかに「出地点」を指して言っているものなのか、若干疑問を禁じ得ない。本器はもと陳介祺（篋齋）の所蔵で、『周金文存』巻五の金説に「效貞，篋齋蔵貞第一，扨題記謂器出雒陽市。」との記述がある。『篋齋蔵古冊目並題記』（姫覚彌叙，鄒安校本，1920年）九にも同文がある。しかし、『篋齋蔵古目』（1881年）の本器の項にはこうした「器出雒陽市。」云々との記事はない。陳夢家（断代）は、この器が西安出土であるとの説もあることを紹介しつつもそれを否定し、「当出土于河南境内，或即洛陽所出。」と述べている。西安出土との説は何に載っているのか、不明である（因って、異説としては扱わな

い)。また、陳氏自身、特に確かな情報をもっているようでもない。ひとまずは、綴遺の言うところを採ることとする。

- ・鼎（5字） 初出著録：貞松2-28-1，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく、七年後の頌齋統に初めて上記データが現れる。作器者は詠啓なる人物である。

- ・鼎（6字） 初出著録：貞松2-31-1，出土データ：“此器与盪且壬鼎同出雒陽”（貞松）

初出著録である貞松に上記の出土データとともに載る。その盪且壬鼎は貞松2-39に著録され、「此器近出雒陽」という出土データを持つ（cで後述。但し、その器には同出器についての記述はない）。作器者は歸なる人物である。

- ・鼎（7字+図象銘） 初出著録：貞松2-41-1，出土データ：“出於洛陽”（双剣金）

初出著録である貞松には出土データがなく、十年以上経って、双剣金に初めて上記データが現れる。作器者は珣なる人物である。

- ・殷（3字+図象銘） 初出著録：貞松4-35-1，出土データ：“同出于洛陽同銘者，有鼎卣罍觶各一，尊觚各二。”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく、七年後の頌齋統に上記のようなデータが現れる。頌齋統の記述によれば同銘器は計8件になる。

- ・殷（4字） 初出著録：貞松4-37-1，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく、七年後の頌齋統に初めて上記データが現れる。

- ・殷（5字） 初出著録：貞松4—39—3，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく（集成が貞松にデータがあるように言っているのは誤り）、善齋器も出土については触れない。頌齋統に初めて上記データが現れる。なお、本器には同銘の器がもう一件あり、貞松統上35—3に著録される。それはあるいは善齋器に「尚見一残器于上海古玩肆，銘同。」（頌齋統もその文を引き写す）と言っているものであるかもしれない。集成（3456）は、そちらについては貞松統の摹本をそのまま載せるのみで、出土等についても全く触れない。

- ・殷（6字） 初出著録：貞松5—8—3，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく、善齋器も出土については触れない。頌齋統に初めて上記データが現れる。善齋器・頌齋統いずれも蓋だけの著録である。作器者は嬴雷恵なる人物である。

- ・尊（4字） 初出著録：貞松7—8—4，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく、七年後の頌齋統に初めて上記データが現れる。さらに頌齋統は「葉氏平安館藏一卣，及小校經閣金文録一鼎，与此同銘。以此尊色沢觀之，蓋与同出土而久未經著録者也。」とも言う。それら二件の出土については残念ながら確認できない。作器者は辛なる人物である。

- ・尊（4字） 初出著録：貞松7-9-2，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

初出著録である貞松には出土データがなく，七年後の頌齋統に初めて上記データが現れる。

- ・尊（6字） 初出著録：貞松7-12-1，出土データ：“出土洛陽”（頌齋）
初出著録である貞松には出土データがなく，二年後の頌齋に初めて上記データが現れる。作器者は段金歸なる人物である。

- ・卣（5字+図象銘D） 初出著録：貞松8-19-3，出土データ：“洛陽出土”（善齋器）

初出著録である貞松には出土データがなく，五年後の善齋器に初めて上記データが現れる。

- ・卣（25字+図象銘） 初出著録：貞松8-29-2，出土データ：“洛陽出土”（善齋器） 民国十七年洛陽出土（通考）“伝河南洛陽馬坡”（集成）“伝1929年河南洛陽馬坡出土”（文物精華大辞典 青銅卷）

作器者は作冊鬲なる人物で，作冊鬲卣と呼ばれる器である。初出著録である貞松には出土データがなく，五年後の善齋器に初めて上記データが現れる。なお最近の集成や『文物精華大辞典 青銅卷』の記す馬坡出土とのデータは，いずれから得られたものか確証がない。なお，『文物精華大辞典 青銅卷』が掲げる写真は誤りで，別の器のものであり，該書が提供する情報の信頼性を疑わせる。確認し得るのは洛陽出土というところに止まる。

- ・盤（16字） 初出著録：貞松10-26-2，出土データ：“所見簋四盤一匜一同出于洛陽”（善齋器）

初出著録である貞松には出土データがなく、五年後の善齋器に初めて上記データが現れる。ところが、善齋器にいう簋は貞松に「近出雒陽」とある（c 参照）。

- ・鼎（2字） 初出著録：貞松補上4-2，出土データ：“洛陽”（三代表）

本器については、初出著録である貞松補には出土データが記されず、同年の刊行になる羅福頤の『三代秦漢金文著録表』の出土地の項に「洛陽」と記される。さらに表では、「銘刻字在耳上，列国器。」とのコメントがついている。その後の著録の十二家は洛陽出土とのデータは載せていない。信頼性に疑問の残る出土データであると言えよう。羅福頤は貞松補を見ているから（表の引用書目に挙げられている）、そこに出土データがないことは知っていたのであろうし、どこかから情報を得て付け加えたとも考えられよう。しかし、三代表に言う如く、本銘は刻銘であり、しかも通常の銘文がある位置ではない部位にあるという。それ故、本来の銘文ではなく、後世、出土後の偽銘と判断するのが妥当であると思う。よって、本稿の扱う対象からは除外する。器そのものは、器形・紋様からすれば殷後期の器であり、真であろうと判断されるけれども、上の事情によれば、銘文は勿論、出土データについても疑問があるとすべきである。

- ・方鼎（41字+凶象銘） 初出著録：貞松補上13（器）貞松統中4（蓋），出土データ：“出于洛陽”（善齋器）

我方鼎あるいは禦方鼎などと呼ばれてきた器である。本器は大変に問題の多い器である。器種を確定するならば、蓋付きの方鼎ということになるかと思う。まず最初に器身のみが貞松補に著録された。そこでは銘文に関しての考察が中心で（殷金文との判断がなされている）、器そのものについては「此方鼎近見之都肆。」との情報を記すに過ぎない。続いて、三年後に刊行された（跋

は1933年仲夏となっているので、実は貞松補の二年後に成った)貞松続に「禦父己簋」として同銘がもう一件著録される。こうして同銘が二つ揃うこととなった。その後、著録によって器種に混乱があり(善齋金や小校は甗とする)、二銘の拓を鼎の器蓋として正しく掲げたのは続殷存上25~26が最初である。さらに尊古2-18~19に拓・器影(写真)が掲げられ、両銘の資料はここに出揃うこととなった。本器に関して貴重な情報を与えてくれるのは善齋器である。即ち、本器(善齋器著録の器身)の説明部分で、「案此器出于洛陽，初由虹光閣購得，僅殘銅數片，轉售于尊古齋，補綴成今形。後其蓋復出，形略如盨蓋，索價甚昂，善齋不之取，今不知歸何所矣。」と記しているのである。かなりひどい破碎状況で出土し、尊古齋がそれを修繕して現在見ることができる形にしたと推される。現在は器が台湾中央博物院の収蔵であり、蓋は行方不明である。器形の上ではさして不審な点はなく、似たような形の方鼎は新出器の中にもある(陝西出土2-99~100, 同3-84)。上のような事情から、銘文にも器蓋で違いがあつて(しかもいかにもよく見えない部分を想像で補った結果生じたような違い)、必ずしも信を置きがたい部分もあり、資料として用いるにはよほど慎重であらねばならない。とはいえ、洛陽出土というデータそのものにまでそれが強い疑いを抱かせるとまでは言い切れないので、ひとまずここに掲げておく。

・鬲(2字+図象銘) 初出著録：貞松補上15-2, 出土データ：“伝洛陽出土”(三代表)

初出著録である貞松補には出土データが記されず、同年刊行の『三代秦漢金文著録表』の出土地の項に「伝洛陽出土」と記される。なお、本器も前々器と同じく十二家に著録され、孫政(秋帆)の式古齋の所蔵である。式古齋は、北京、琉璃廠にあった骨董商である。十二家の式古齋蔵器にはやはり洛陽出土とされる穆父鼎(貞松補上9-1, cで後述)も含まれているから、あるいは、

洛陽出土との触れ込みの器数件をまとめて入手したのかもしれない（そうした中に、前述の鼎のような不審なものも混じってしまった、という可能性があるのではないか）。

- ・不明（図象銘） 初出著録：貞松補上 19—1，出土データ：“出洛陽”（貞松補）

およそ情報に乏しく、器種も不明であって、集成は「器」としか記さない。出土データが残っているのが不思議なくらいである。

- ・殷（3字+図象銘A） 初出著録：貞松補上 20—2，出土データ：“与臣辰諸器同出洛陽”（善齋器）“洛陽出土”（集成）

初出著録である貞松補は出土データを示さず、善齋器が上のようなデータを示す（頌齋続や通考も同じ）。後述の臣辰盃（dの一件め）などを参照のこと。

- ・貞（存6字） 初出著録：貞松補中 9—1，出土データ：“洛陽出土”（河南臚稿）

初出著録に出土データが記されている。本器には同銘の尊があり、尊古に著録されている。同銘の貞と尊のセットは例が多く、本器もその例かとも見られよう。しかし、不審な点がいくつかある。まず、河南臚稿が同銘の尊について全く触れず、情報を得ていないかと思われることである。次に、同銘の貞と尊のセットは同じ紋様を飾るのが通例であるのに、この貞と尊は全く別の紋様を飾っていることである。セットとしては不審な点の残るけれども、器自身に洛陽出土とのデータがあるので、ここに列しておく。作器者は愁なる人物である。

- ・觚（6字+図象銘） 初出著録：貞松補中 19—2，出土データ：“出於雒陽”（双剣金）

初出著録である貞松補は出土データは記さず、「此觚近見之都肆。」とだけ言う。約十年ほど後の双剣金が上のようなデータを記している。

- ・觶（2字+図象銘） 初出著録：貞松補中21-3，出土データ：“与我作父己鼎同出於雒陽”（双剣金）

初出著録である貞松補は出土データを示さず、「近見之都肆。」と言うのみである。双剣金に至って上記のデータを初めて示した。「我作父己鼎」は先に挙げた。同じ図象銘・祖先名を銘文中に含み、共通点を持つ。

- ・鐘（5字） 初出著録：貞松補中31，出土データ：“兄云洛陽出土”（金文分域編）

- *鐘（5字） 初出著録：集成6，出土データ：“洛陽，同出七件（≪分域≫10.15引柯昌泗語）”（集成）

初出の貞松補は一件のみを挙げつつ、「此器状如編鐘，見都肆。」との情報を記す。その「此器状如編鐘」という「如し」とは、どういうことであるのか、もし羅振玉が編鐘の実物を見ていれば「如し」とは言わないであろうから、彼も実物は見えていないのであろうか。同じ銘文を持つもう一件が、最近、集成に初めて著録された。出土データとしては、前者について柯昌済の『金文分域編』に「兄（=柯昌泗）云洛陽出土。」と言うのが古い。集成は「洛陽，同出七件（≪分域≫10.15引柯昌泗語）。」と言うけれども、分域編には「同出七件」といった文はない。加えて、そこに言う七件の詳細もわからず、何に基づいてそう言うのかもわからない、不審なデータである。なお、後者の出土データについては、集成は前者に同じとするだけである。これまで未著録であった（しかも現蔵も不明の）ものについて、何を根拠にしてそう言うのか、明らかな材料はない。また、上記二件中、集成は、前者については時代を「春秋」とし、後者については「西周晩期」としていて、不揃いである。集成の言うところ

ろは万事が万事不審であると言わざるを得ない。なお、紋様から言えば、両器とも西周後期に属すると思われる。以上、本器を洛陽出土と言うのは分域編の記述に係っているのであり、分域編所載の前者のみひとまず洛陽出土とし、集成に初出の后者については除外する。

- ・甗（8字+囟象銘） 初出著録：欧華2—100（＝河南贗稿8～9？），出土データ：“河南出土”（河南贗稿）“出土於洛陽”（通論）
- ・甗（8字+囟象銘） 初出著録：河南贗稿8～9？，出土データ：“河南出土”（河南贗稿）“出土於洛陽”（通論）

作器者は乃子なる人物である。これら甗二件については込み入った事情があるので、初出の時期が違う（表では後者が離れてやや後になる）けれども、考察上ここに並べておく。河南贗稿は本器を二件あるものとして8～9葉に載せており、そのうち8については「今帰欧洲某氏」にして欧華2—100に著録されていることを言い（つまり欧華が初出著録）、9については河南贗稿が初出ということになる。しかし、それら二件について、通考は「従銘文上辨之、疑是一器」、さらに同じ著者（容庚）の通論は「贗稿囟八・囟九両器、実是一器の前後両面」といっそう明確に、河南贗稿は本来は一件しかないものを誤って重出させてしまったものだ、と指摘して来た。集成によると、現在、甗部は旅順博物館の蔵、鬲部は吉林大学歴史系の蔵で、欧華に載せる図と違いがあり、あるいは誤りがあるだろうと言う。さらに集成は、容庚が通考や通論で本器は一件しかないことについては疑問が残るとしている。河南贗稿では収蔵について「欧洲某氏」と言い、欧華には「ニューヨーク、福島氏」と言う。それがまた中国に戻って、甗と鬲とに泣き別れの上、旅順博物館や吉林大学歴史系の蔵になったとはまず考え難い。河南贗稿が二件あるとしながら同一器の拓を掲げてしまったのは指摘される通りの誤りながら、二件ではなく一件とする容庚の指摘も必ずしも正しくないかもしれない。河南贗稿8の説明に言うように、

まず一件（河南贖稿8の器）が欧米に渡ったことは欧華に載せられていることから明らかであり、そして欧華が1933年の刊行であるから、その器が早くから欧米にもたらされたことは確認できる。一方、河南贖稿9について、孫海波は「右甗与上器（＝河南贖稿8）同河南出土，文飾款識並同，蓋同坑所出之物。民国二十五年春，見于北平廠肆，忽忽拓影，尺度約与前同。」と言っており、民国二十五年は1936年であるから、先に欧米に渡った器が舞い戻って来て北京の店先に並んだとは考えにくいと思われる。従って、やはり、河南贖稿が掲げるところの二件があるものとするのが妥当であろう。しかしながら、これまでに残されている拓は全て同一器のものであり（河南贖稿8のもの）、もう一件のものがないことはいかにも不審である。さて、これら二件の出土について、初出の欧華あるいは河南贖稿は、前者は何も記さず、後者は「河南出土」というだけであり、後者の二年後、通考が「出於洛陽」と初めて記す。出所は不明であり、しかも上に記したように、通考の著者容庚は本器について必ずしも確かな情報を得ていたとも思われない。疑問の残るところである。「洛陽出土」というデータについては、あるいはその銘文に含まれる図象銘（図象銘B）に基づくところがあるのかもしれない。このように、本器をめぐる状況には不確かな部分が多い、と言わざるを得ず、洛陽出土との情報は必ずしも信頼し得るものではないと判断し、本稿の扱う対象からは除外する。

・殷（2字+図象銘C） 初出著録：欧華2—119，出土データ：“右簋与父乙臣辰鼎父乙臣辰卣同出于洛陽”（河南贖稿）

初出著録である欧華は出土データを示さず、河南贖稿が上のようなデータを示す。同銘の殷が二件あり、両器とも現在アメリカ、ハーバード大学、フォッグ美術館の収蔵になる。但し、「洛陽出土」とのデータ付きで著録に現れるのはこの欧華の器の方だけである。

- ・尊 (6字) 初出著録：白鶴5, 出土データ：洛陽 (集成)

作器者は榮 (榮) 子なる人物である。本器は戦前から日本に将来され、白鶴吉金集 (1934年) に著録されたのが初出であり、現在も神戸の白鶴美術館の藏品である。但し、出土データについては、白鶴美術館のカタログには一切載せず、日華も触れていない。ただ集成のみが洛陽出土とする。あるいは、本器に直接関わってのデータではなく、同じ作器者 (榮子) の同銘の方彝に関して陳夢家の「榮子諸器, 伝洛陽出土。」(分類 A 648 R 332) といった情報があるから、それに基づくものであるかもしれない。ところが、その方彝は実は二件あり (集成 09980・09981), そのうち前者には上のようなデータがあり、集成もそれを引くけれども、後者 (根津美術館藏品) については集成は何ら出土について言及していない。どう考えるにしても、集成のデータの書き方は信頼性が弱い。以上から、本器の出土地点を洛陽とする集成の言は、陳氏を越える情報であるとは認めがたく、特に重視する必要はあるまいと考える。

- ・鼎 (2字) 初出著録：善齋金 2—13, 出土データ：“出于洛陽” (頌齋統)
- ・尊 (2字) 初出著録：善齋金 4—62, 出土データ：“出于洛陽” (頌齋統)
- ・觚 (2字) 初出著録：善齋金 5—22, 出土データ：“出于洛陽” (頌齋統)
- ・盤 (2字) 初出著録：善齋金 9—46, 出土データ：“出于洛陽” (頌齋統)

いずれも「魚従」なる銘を持つ器である。初出著録である善齋金は出土データを載せず、頌齋統に至って洛陽の出土であることを言う。なお、通考は鼎について「同出洛陽同銘者尚有簋・盤・卣・盃・尊・觚各一。」と言い、同銘器群が洛陽から一緒に出土したらしいことをうかがわせる。残る簋・卣・盃については、それら自身に関しては著録に「洛陽出土」とは言わない (fで掲げる)。

- ・觚 (1字) 初出著録：善齋金 5—8, 出土データ：“出于洛陽” (頌齋統)

・觚（1字） 初出著録：善齋金5—9，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
いずれも「遽」なる銘を持つ器である。初出著録である善齋金は出土データを載せず，頌齋統に至って洛陽の出土であることを言う。なお，頌齋統は「同銘者有遽簋。又遽從鼎五器及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽罍皆同出者也。」と言う。それらの器自身については著録に「洛陽出土」とは言わない（fで掲げる）。

- ・鼎（2字+図象銘） 初出著録：善齋金2—18，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・鼎（4字） 初出著録：善齋金2—43，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・尊（3字+図象銘） 初出著録：善齋金4—74，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・觚（7字+図象銘） 初出著録：善齋金5—45，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・罍（図象銘） 初出著録：善齋金5—52，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・罍（2字+図象銘） 初出著録：善齋金5—77，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・罍（6字） 初出著録：善齋金5—91，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・爵（2字+図象銘） 初出著録：善齋金7—40，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）
- ・殷（図象銘） 初出著録：善齋金8—5，出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）

以上の9件はいずれも善齋金に初めて著録され，その後，頌齋統に至って「出于洛陽」という出土データが示されたものである。個々について特にコメントもないので，便宜的にまとめておいた。善齋金は器の図や尺寸は掲げるけ

れども出土データは原則的に示さないから、善齋金から四年後の頌齋統に至って出土データが示されたことに不審の念をもつ必要はない。上記のように、善齋すなわち劉體智から頌齋すなわち容庚へと收藏が移った器は多い。特に、頌齋統に所載の器（即ち容庚氏の蔵器）の内、75件が劉體智からの購入であり、「價目不易分計」であると容氏自ら言う（通考上168～169頁）。何か両者の間に特別な関係があったのであろうか。劉體智（号は善齋。1879～1963）は、甲骨や青銅器の收藏家として著名な人物である。清末の四川総督劉秉璋の第四子で、戸部郎中・大清銀行安徽総辨に任ぜられ、のち、1919年には中国実業銀行上海分行經理の任につき、さらには総經理にもなっている（1935年に退職）。1962年には上海文史館館員となり、間もなく病気でなくなったという（以上は、劉體智『異辭録（清代史料筆記叢刊の一）』中華書局、1988年、の前言の部分による）。上海に縁の深い人物であるらしい。容庚氏は戦前は主に北京（北平）で活躍していたから、二人の接触はどこから生じたのであろうか。

- ・匱（16字） 初出著録：貞松統中26，出土データ：“所見簋四盤一匱一同出于洛陽”（善齋器）

初出著録である貞松には出土データがなく、五年後の善齋器に初めて上記データが現れる。ところが、善齋器にいう簋は貞松に「近出雒陽」とある（c参照）。

- ・觶（8字） 初出著録：貞松統中37。善齋金5—92。頌齋續80（?）。出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）“伝出土於洛陽，同銘的有二器。”（通論）
- ・觶（8字） 初出著録：頌齋統80（?）。出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）“伝出土於洛陽，同銘的有二器。”（通論）
- * 觶（8字） 初出著録：頌齋統80（?）。出土データ：“出于洛陽”（頌齋統）“伝出土於洛陽，同銘的有二器。”（通論）

本器は、まず一件が貞松統に初めて著録され、その後、頌斎統に至って「出于洛陽」という出土データが示された。貞松統は一件のみを挙げ、一年後に小校が二銘を挙げる。続いて、頌斎統が、貞松統の器と別の器を著録し、「出于洛陽」なるデータ及び「又有一罈文同，蔵合肥李氏。」なる情報を付した。さらにその両銘についていずれも洛陽出土であると通論が述べた、ということになるのであろう。しかし、拓本を見ると、これまでの著録類がいずれも同一としている善齋金の拓と頌斎統の拓とではやや違いがあり、特に齊字は明らかに違うと思われる（剔抉によるとも思えない）。宝字の左縦劃についても、頌斎統の拓だけがすっきりと真っすぐな線を描いている。頌斎統の拓だけが、他に比べてきれいであり、不審の念を抱かざるを得ない。ことによると、貞松統・善齋金・頌斎統の三件が存在するのであろうか。事情にやや込み入ったところがあるので、ここに三件まとめておく。

- ・鼎（2字+図象銘A） 初出著録：小校2-20-3，出土データ：河南洛陽（集成）

初出は小校で、一年後の三代にも著録され、それ以後、集成まで著録されることはなかった。出土データについて触れるのは集成が最初であるけれども、その根拠はわからない。小校及び三代からは洛陽出土というデータは決して出てこないで、出所不明のデータということになる。洛陽出土とされる伝世品青銅器によく見られる図象銘Aが本器の銘文中にもあり、集成はそれを根拠にしているのではないかと推される。よって、このデータについては存疑の扱いにしておくのがよいと判断される。なお、集成によると、器は現在は北京の故宮博物院の所蔵であるという。

- ・爵（図象銘） 初出著録：小校6-25-6，出土データ：“出于洛陽”（頌斎統）

初出は小校で、一年後の三代にも著録され、現在の所蔵は不明である。

- ・鼎（2字+図象銘C） 初出著録：三代2-46-8，出土データ：洛陽（集成）

初出は三代で、それ以後、集成まで著録されることはなかった。出土データについて触れるのは集成が最初であるけれども、その根拠はわからない。三代からは洛陽出土というデータは決して出てこないのであり、また集成によると現蔵は不明であるとのことであるから、新情報が加わったとも考えられない。出所不明のデータということになる。銘文は例の図象銘Cであり、例の洛陽出土とされる伝世品青銅器によく見られるものである。集成はそれを根拠にしているのではないかと推される。よって、このデータについては存疑の扱いにしておくのがよいと判断される。

- ・方彝（6字） 初出著録：三代6-36-4，出土データ：“榮子諸器，伝洛陽出土”（分類）

初出は三代で、早くから海外へ流れ、シカゴの Art Institute of Chicago の所蔵である。陳夢家らによる該館のカタログ『Chinese Bronzes from The Buckingham Collection』（1946年）には出土に関する記事はなく、陳氏の分類に至って初めて出土に関する記載が出、関連器の集成も行われた。なお、同銘の方彝がもう一件存在し、日本の根津美術館に収蔵される。その器に関しては出土のデータは見当たらないようである。

- ・扁足鼎（無銘） 初出著録：河南贛稿1，出土データ：“洛陽出土”（河南贛稿）

足の付け根に人面を飾る、底の部分がさらに下へ張り出す等、かなり異様な扁足鼎である。初出は河南贛稿であり、その後は、あるいはピルズベリ氏のカ

カタログに載っているだけらしい（ピルズベリのカタログを見ることができなかつたので推測として触れておく。林巳奈夫氏の『殷周時代青銅器の研究』図版冊の扁足鼎25がそれであろう）。本器について、河南贖稿は「右鼎洛陽出土。開封蘭石菴氏搜集。尺度未詳。」と述べている。著者の孫海波氏も器を実見はしていないらしい。本器は、その後ピルズベリ氏の所蔵になったかと思われる（それならば、本器は現在は、アメリカ、ミネアポリスにあることとなる。）。

- ・鼎（無銘） 初出著録：河南贖稿2，出土データ：“洛陽出土”（河南贖稿）
初出は河南贖稿であり、その後はあるいはいずれの著録にも見えていないかもしれない。河南贖稿に洛陽出土とのデータが記される。一見貧相な感じの鼎で、銹回りも甚だしい。林巳奈夫氏は、『殷周時代青銅器の研究』図版冊、鼎366において本器を春秋時代のものとしている。銹を通して見える紋様からすればもっと古い時代のものとしてもよいように思う。
- ・罍（2字+図象銘） 初出著録：河南贖稿39，出土データ：“洛陽出土”（河南贖稿）
初出著録に出土データが記されている。
- ・鼎（7字+図象銘） 初出著録：白鶴撰23，出土データ：“河南省洛陽の出土と伝える”（日華）
初出著録の白鶴撰には出土データは示されず（集成がそこに載っているかのように言うのは誤り）、日華が上記のデータを示す。
- ・爵（4字） 初出著録：金匱論古初集 p.161～2，出土データ：“河南洛陽”（金匱）

- ・爵（4字） 初出著録：金匱論古初集 p.161～2，出土データ：“河南洛陽”（金匱）

同銘，同形，同紋の爵二件が，初出著録に出土データとともに載せられている。これら二件についての資料は，目下のところ，結局初出著録である金匱論古初集以外にはない（集成はその複）。4字の銘文があるとのことであるが，写真を見ると，爵に於ける通常の銘文部位である蓋下には見当たらない。他の場所にあるとすると，偽作の疑いもかけてよいかもしれないが，判断材料は他に何もなく，ひとまずはここに列しておく。

- ・殷（6字） 初出著録：Musée Cernuschi, La découverte de l'Asie, Paris 1954 Pl. XVIII，出土データ：洛陽（Wessén）

初出著録は未見。カールグレンの *Bronzes in the Wessén Collection*, B. M. F. E. A. 30, 1958 の言うところをそのまま掲げた。本器はナタナエル・ヴェッセンのコレクションになり，Lo-yang とだけ出土データは示される。

- ・尊（46字） 初出著録：断代（二） p.79，出土データ：“伝河南洛陽出土”（文物精華大辞典 青銅卷）
- ・卣（46字） 初出著録：断代（二） p.79，出土データ：“伝河南洛陽出土”（文物精華大辞典 青銅卷）

作器者の名をとって召尊・召卣と呼ばれる同銘のセットの器である。これら召尊・召卣のセットについて洛陽の出土とするのは文物精華大辞典が唯一である。初出は陳夢家の西周銅器断代で，そこには尊を掲げて「同出者尚有一同銘之卣，1948年見于北京。」とは言うものの，出土については何ら言及がない。その後このセットは上海博物館の藏品となり，上海博物館の図録である『上海博物館藏青銅器』にも載せられているけれども，やはり出土については全く触れられていない。集成も何も触れていない。こうした経過からすると，文物精

華大辞典の言うところは出所不明と見るべきで、信が措けないものと言わざるを得ない。よって、本稿の扱う対象から除外する。

- ・尊（2字） 初出著録：White 1956 p.109—1, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・殷（2字） 初出著録：White 1956 p.109—2, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・觚（2字） 初出著録：White 1956 p.109—3, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・觚（2字） 初出著録：White 1956 p.109—4, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・爵（無銘） 初出著録：White 1956 p.109—5, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・爵（無銘） 初出著録：White 1956 p.109—6, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・罍（無銘） 初出著録：White 1956 p.109—7, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・爵（無銘） 初出著録：White 1956 p.110—8, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・爵（2字） 初出著録：White 1956 p.110—9, 出土データ：洛陽（White 1956）
- ・鼎（無銘） 初出著録：White 1956 p.110—10, 出土データ：洛陽（White 1956）

White 1956 に The Ancestor Hsin Set として載せられる一群の器である。ホワイトによれば、これらの器は、1930年、開封の骨董商の洛陽支店の者によって、上記十件中、初めに七件、後に残り三件がホワイトの元へ持ち込まれ

た。これらについては、洛陽出土ということがわかるのみで、詳細な地点などは不明であるという。また、1930年というのはあくまでもホワイトの元へ持ち込まれた時であって、出土の時期ではない。しかしながら、出土からさして間がないうちにホワイトの元へ届けられたことには相違なく、器群として扱うことも可能であることは貴重である。

- ・鼎（2字） 初出著録：殷周青銅器と玉 図66，出土データ：“洛陽出土”（殷玉）

現在出光美術館に収蔵され、高さ約55センチの立派な鼎である。時代は殷後期に属すると思われる。本器は、水野清一氏の『殷周青銅器と玉』に初めて著録され、そこで図の下キャプションや説明部分（14頁）において「洛陽出土」と言う。しかし、出光美術館のカタログでは、本器が洛陽出土であるというものはただの一つもない。水野氏が何に基づいてこのように言ったのかはわからないけれども、浮いた記述であることは覆いようがない。まして、洛陽出土とされる青銅器には殷代の器がほとんど無いのであるからなおさらである。「洛陽出土」との情報は信を措き難く、ここでは対象から除外するのが妥当であると考ええる。

- ・盤（6字） 初出著録：中日7-719，出土データ：“伝河南洛陽”（集成）

中日に初めて著録され、その後は、集成に取り上げられているだけである（なお、集成の拓は中日の複）。集成が「伝河南洛陽」という出土データを示し、現在の所蔵についても「日本福岡九州大学」というデータを示すけれども、いずれについてもその根拠は不明で疑問がある。現在の所蔵について中日は [P. C. Kyushu] とだけ記しており、これは中日の体例からすれば「九州の個人所蔵」の意味になるはずで（P.C.とはプライベートコレクションの略）、それがそのまま九州大学の所蔵の意味にはならない。また、出土データについても、

おそらく、前掲の尊と同じく、同じ作器者（榮子）の他の器に関して「榮子諸器，伝洛陽出土。」（分類 A 648 R 332）といった情報があるから、それに基づいて集成が加えたものであろうかと思われる。集成に示されるデータは出土も収蔵もその根拠に不審な点があり、いずれも取り上げる意味がないとせねばならない。ここでは対象から除外することとする。

・鼎（図象銘 D） 初出著録：集成 1026，出土データ：“洛陽”（集成）

集成に初めて著録され、現在、北京の故宮博物院の収蔵であると言う。出土データについて集成は「洛陽」とだけ記す。銘文は図象銘 D であり、洛陽出土とされる器に多く見られるものである。まさにこの器に関して出土地点のデータが残されていたのかどうか、このデータがどれほど信頼できるものであるか、疑問があると言わねばなるまい。存疑としておく。

・鼎（2字+図象銘 C） 初出著録：集成 2005，出土データ：“洛陽出土”（集成）

集成に初めて著録され、現在北京の中国歴史博物館の収蔵である。器影は『中国歴史博物館蔵法書大観 第二巻 金文二』（柳原書店、1997年）で見ることができる。出土データについて集成は「洛陽出土」とだけ記す。銘文は図象銘 C であり、洛陽出土とされる器に多く見られるものである。出土に関するこのデータがどれほど信頼できるものであるかは、前器と同様の事情である。存疑としておく。

・殷（2字+図象銘 C） 初出著録：集成 3422，出土データ：“河南洛陽”（集成）

集成に初めて著録され、現在、北京の故宮博物院の収蔵であると言う。集成には「残底」とあり、器は甚だしく破損しているらしい。出土データについて

集成は「河南洛陽」と記す。出土に関するこのデータがどれほど信頼できるものであるかは、前器及び前々器と同様の事情である。存疑としておく。

- ・觶（図象銘 A） 初出著録：集成 6029，出土データ：“洛陽”（集成）

集成に初めて著録され、現在、旅順博物館の収蔵であると言う。銘文は図象銘 A であり、洛陽出土とされる器に多く見られるものである。出土データについて集成は「洛陽」とだけ記す。出土に関するこのデータがどれほど信頼できるものであるかは、前器と同様の事情である。存疑としておく。

- ・觚（3 字） 初出著録：集成 7204，出土データ：“洛陽”（集成）

集成に初めて著録され、現在、上海博物館の収蔵であると言う。出土データについて集成は「洛陽」とだけ記す。陽文で三文字の銘文はあるいは「米宮彝」と釈し得ようが、意味は不明である。真銘かどうか、判断は難しい。出土データというよりも銘そのものの真偽に疑問が大きいので、対象からは外すのが無難であろう。

- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 41，出土データ：“洛陽出土”（国立歴博）
- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 43，出土データ：“河南洛陽出土”（国立歴博）
- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 44，出土データ：“河南洛陽出土”（国立歴博）
- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 44，出土データ：“河南洛陽出土”（国立歴博）
- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 44，出土データ：“河南洛陽出土”（国立歴博）
- ・爵（無銘） 初出著録：国立歴博 44，出土データ：“河南洛陽出土”（国立歴博）

歴博)

- ・爵(2字) 初出著録: 国立歴博45, 出土データ: “河南洛陽出土”(国立歴博)
- ・爵(無銘) 初出著録: 国立歴博47, 出土データ: “河南洛陽出土”(国立歴博)
- ・爵(無銘) 初出著録: 国立歴博48, 出土データ: “河南洛陽出土”(国立歴博)

以上は、いずれも、最近出版された国立歴史博物館編『国立歴史博物館館蔵青銅器図録』(国立歴史博物館, 1995年)に載せられたものである。該書によれば、国立歴史博物館所蔵の青銅器は、①政府撥交文物(戦前の河南博物館の藏品や戦後に日本から還された文物を含む)、②個人から寄贈された文物、③館が購入してきた文物、の三類からなり、洛陽出土文物については①に属するものであるらしい。あるいはいずれも未著録の器かと思われる。詳細はまるで不明であり、四件並べての写真(国立歴博44)の場合には、各器のサイズもわからなくなってしまった。洛陽出土伝世品青銅器としては最も後出ということになる。

以上、単に「洛陽出土」とされる器について、ひとつおり見た。取り上げた器は88件、うち出土データが疑わしいものは9件、信頼性が薄く除外すべきものは7件あり、それらを除いて、特に疑うほどでないもの72件、という結果を得た。大体8割について、ひとまずは本稿が扱う対象となる、ということになる。この結果は重大に受け止めておく必要があると思われる。青銅器の出土地点に注意を払うようになって以降、一般の著録の記載は勿論、拓本の題跋中の零細な記事も見て、器の出土地点を特定しようとする作業は、ますます精緻に(あるいはマニアックに)行われるようになってきた。しかし、充分に信がおけない記載も当然あるはずであり、その検討を怠ってはならない、という

ことがこれまでのところだけでも了解されるのである。

本稿が示す a~f の分類では、この a が最も多い。即ち、器についてただ洛陽出土としか知られないケースが最も多いということである。器に関するデータがいかに伝わらないものであるかを嘆くべきか、それとも洛陽出土というデータが残されたことをひとまずは喜ぶべきか、複雑なところである。

b 洛陽近郊というもの

次には、洛陽近郊出土というものを挙げておく。「洛陽出土」で片付けず、敢えて洛陽近郊の出土であることを言う例がいくつかあり、それらをここでは拾い上げてみる。但し、「近郊」というその範囲が実はさっぱり具体的ではないので、特に重大な意味がそこから発生するとは限らない。

- ・彝 (?) (40 字) 初出著録：考古図 4—44, 出土データ：“右得於洛郊” (考古図)

考古図所載の器ながら「形制未伝」として図がなく、銘文のみが伝えられ、器種は不明である。彝とは、よくあるように殷のこともかもしれないけれども、断定はできない。銘文の内容からすれば殷代のものと考えられ、殷金文の中でも長い方に属する、貴重な資料である。考古図に言う「得於洛郊」という表現が直ちに洛陽近郊に於ける出土を意味するかどうかは若干の留保をはさむべきであろう。データ全体に特に不審の念を抱く理由はない。

- ・鼎 (4 字) 初出著録：続殷存上 20, 出土データ：“Ausgrabung aus der Nähe von Lo-yang” (使華)

もとオスカー・トラウトマンの収蔵品で、現在は行方不明である。洛陽近郊の出土ということであろうが、どのあたりを指すのか、判断の参考となるべき

具体的データはない。但し、器そのものあるいはデータに関し、疑わしい要素は特にない。

以上、洛陽近郊出土というものを取り上げてみた。実際のところ、「近郊」の実体がつかめないで、前述の「洛陽出土」というもの及び以下に挙げる「さらに詳細な出土地点を言うもの」と、「洛陽近郊出土」というものとの間の差に何か意味があるとは断言はできない。数の上からもこの分類が特別な意味を持つとは言いがたいのも事実ではある。とはいえ、大まかに「洛陽出土」で片付けず、著録が敢えて「洛陽近郊出土」とするそのことに、出土地点に対する金石著録の配慮の在り方を見ることができる。伝世品について見る時、その点について注意する必要がある。例えば、結局ここに出てきた著録は、一つは最も古く宋代の著録であり、もう一つは欧州の著録であって、大量に存在する清末から民国の著録にはむしろそういう表現はない。大きく洛陽と言うかさらに詳細な出土地点を言うか、両極に分かれていくこととなる。

c 近年の洛陽出土と言うもの

次には、地点としては洛陽と言うのみながら、出土した時期について「近年」と言うものを挙げておく。そこにおける「近年」とは、その情報を記す著録にとつての「近年」ということであり、その意味では、以下に並ぶ「近年」には若干の幅が存在することにもなる。とはいえ、この例は、出土して間もなく著録されたということを示すものであり、その意味では、洛陽出土という根本的な情報に関して上記の ab よりも多少は信頼性が増すのではないかとと思われる。

・殷 (69 字) 初出著録：鄭華己 18, 出土データ：“近時出土洛陽” (鄭華)

“兄云辛酉洛陽出土，歸英国”（金文分域編）

銘文の最後の部分にちなんで周公彝（殷）と呼ばれて来た器である。出土後間もなくヨーロッパへ渡り、ジョージ・ユーモルフォポウロスのコレクションに入った。本器に最初に言及するのは鄒華であり、邢侯彝の名で著録され、上記のように「近時出土洛陽」なるデータが示される。その次に本器について言及するのは、松丸道雄氏によると、L. C. Hopkins, *On a Newly Discovered Early Chou Inscribed Bronze*. である（松丸「西周青銅器中の諸侯製作器について」『東洋文化』59, 1979年。但し、このHopkins論文は竹内は未見）。その次の著録である『The George Eumorfopoulos Collection, Catalogue of the Chinese and Korean Bronzes, Sculpture, Jades, Jewellery and Miscellaneous Objects. Volume 1』（1929年）には洛陽出土とのデータはないようであり、続く貞松は「此器近年出土。…今隨市舶入歐洲。」と言い、これも洛陽の出土であるとは言わない。さらに欧華も出土地点については言及しない。同じ梅原末治氏の「洛陽発見と伝へる一群の古銅器に就いて」（『美術研究』57, 1936年）も、文中にたびたび本器に触れつつ（しかも洛陽出土器との関連で！）、本器が洛陽出土とはついに言わない。その後も、通常であれば必ず出土地点について言及する通考（及び通論）が、本器については何も言わないのも気になると言えば気になる。さらに、陳夢家の断代も「二十年前出土」と言うのみで、出土地点については言及しない。洛陽出土というデータを信用しなかったのであろうか。金文分域編には兄（＝柯昌泗）の言として「辛酉洛陽出土」と言う。辛酉は1921年のことであろう（その前の1861年では近年出土とは言えない）。なお、それが正しいとすると、鄒華の成立年代は従来1916年前後としてきたけれども、加筆ということも含め、少し後までずらす必要がある（このことは、既に松丸道雄氏が指摘するところである。松丸氏、前掲論文）。ひとまず、洛陽出土というデータに依ることとする。

- ・尊（7字+凶象銘） 初出著録：湖社月刊第20冊，172頁，出土データ：“洛陽新出土之品”（湖社月刊）

『湖社月刊』第20冊（おそらく1929年），172頁に商祖辛尊として器影と拓とが掲げられ，「高一尺徑六寸，為洛陽新出土之品。金潛厂氏以三千五百金購得者。」との文が付いている。『湖社月刊』は，画家の金紹城（1878～1926。号は北樓）の弟子たちによって1927年11月に創刊された書画関係の雑誌である（最近，天津古籍出版社から復刊された。ここもそれに基づいたが，どうやら原書に忠実でない復刊で，各冊の表紙がとばされ，各号の発行年月日がわからない）。本器を購入したという金潛厂は，金紹城の息子で，名は開藩，号を蔭湖という人物である。本器は，のち，尊古に著録され，現蔵は不明である。作者は怒なる人物であり，同銘の貞については前述（貞松補中9-1，aで触れた）。

- ・方彝（183字+凶象銘） 初出著録：羅振玉「方彝考釈」，出土データ：“近年出洛陽”（貞松）

西周時代でも有数の長い銘を持ち，作者の名にちなんで方彝と呼んでいる器である。河南贖稿が同形同銘で二件あるというのは，断代が指摘するように誤りであって，実は一件である。最も早く本器を収めるのは羅振玉の「方彝考釈」（『支那学』五卷三号，1929年。また，『遼居雜著』，1929年）であろう。そこには摹本と釈文とが示され，本器が近世出土の冠たるに止まらぬとの評のみがあつて，具体的な出土データはない。貞松に至って出土データも記され，即ち，「此彝近年出洛陽，聞已入市舶矣。同出土之器不少，惜不能備知也。」と言う。貞松から二年後の欧華にワシントンのフリーア美術館の所蔵として載せられており，そこにはまた「河南省洛陽附近出土」と記されている。フリーア美術館のアクセスナンバーは30.54であるから，フリーアに収められたのは1930年のことである（陳氏の分類によれば，本器は Tonying

and Company の手を経てフリーアにもたらされたらしい。この会社は他にも洛陽出土品を扱っており、あるいは洛陽の骨董商（盗掘者？）と関係があったのであろうか。なお、本器が海外へ流出した事情につき、『燕京学報』第八期、1930年12月、の、「民国十八、九年国内學術界消息」中の「三 古物流出海外」に記述がある。それによると、上海の商人程某なる者が三万七千金でアメリカ人に売った、という。それこそがフリーアへの売却をいうものであろうか。いわゆる金文著録では古いものほど出土年などについて記載がなく、状況についても曖昧である。一方、早くから論文の形で試みられた考釈類にむしろデータが記されている。

- ・鼎（1字） 初出著録：貞松2-5-1，出土データ：“此器近出雒陽”（貞松）

初出著録に出土データも同時に記されている。本器には同銘の鼎がもう一件あって、続殷存上4に著録されている（集成1228）。但し、そちらには出土データはない。

- ・鼎（9字） 初出著録：貞松2-39-2，出土データ：“此器近出雒陽”（貞松）

初出著録に出土データも同時に記されている。出土データには疑うべき理由はないけれども、銘文は文字がいかにも奇怪で、不審である。

- ・方鼎（40字+図象銘） 初出著録：貞松3-25-2，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）
- ・方鼎（40字+図象銘） 初出著録：貞松3-26-1，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）
- ・方鼎（40字+図象銘） 初出著録：貞松3-26-2，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）

陽”（貞松補）

作器者の名にちなんで作册大方鼎と呼ばれる器である。貞松は「右鼎三文同、皆近出洛陽。」と言い、さらに「与此器同時出土者有矢方彝一・矢方尊一・矢敦二、不知此外尚有他器否。」との記述を付する。ここでは当面問題の作册大方鼎それ自身について「皆近出洛陽」というデータがあるので、まずはそれによってここに分類する。同出分も含め有名かつ重要な器が多いので、出土データはさまざまな著録に見えている。

なお、同じ銘文を持つ器は、貞松に著録された上記の三件がまず世に現れる。のち、陳夢家が四件目の拓を紹介し（断代（三））、「1941年4月在昆明桃園村接獲第四器拓本」と述べ、さらに、別の拓本を于省吾が録遺に掲げている。上に引いた貞松の文に明らかなように、当初は三件の出土とされていたのであり、残る一件は長くその存在そのものが知られなかったのであった。第一器と第二器は現在台湾の中央博物院の所蔵、第三器は現在ワシントンのフリーア美術館の所蔵になり、いずれも拓・器影を何通りも見ることができている。最後に出てきた第四器については、長らく断代・録遺及び集成の三種類の拓本が見られるのみで、器影は出たことがなかった。最近、第四器は、現在はアメリカ、ヴァージニア州、ノーフォークのエルミタージュ財団の所蔵になると報告され、器影もようやく見ることが可能となった（W.Thomas.Ancient Chinese Bronze Art,China House Gallery.1991）。従来知られる作册大方鼎と同紋・同形で、尺寸もほぼ等しく、さらに成分分析上も近似値を示しており、作册大方鼎第四器として認めてよい（fで扱う）。なお、そのアクセッション・ナンバー（50.G.11）からすると、おそらく1950年にエルミタージュ財団に入ったものであろうが、フリーア美術館の器のアクセッション・ナンバーが（50.7）であって、これもやはり1950年に入ったものであろうから、二件同時にアメリカにもたらされたのであるかもしれない。出土については、貞松に「右鼎三文」と言っているから、羅振玉がつかんでいた情報では三件しかないということであった

のだろう。四件同時の出土ではないのであろうか（しかしそれも考えがたい）。いささか疑問の残るところではある。

- ・殷（図象銘 D） 初出著録：貞松 4-24-2，出土データ：“近年雒陽出土”（貞松）
- ・殷（図象銘 D） 初出著録：貞松 4-24-3，出土データ：“近年雒陽出土”（貞松）
- ・殷（図象銘 D） 初出著録：貞松 4-24-4，出土データ：“近年雒陽出土”（貞松）

同銘三件，いずれも貞松に著録され，そこに「右三器同文，近年雒陽出土，不知帰何所。」と記される。第一器と第二器はまず善齋，次いで頌齋の所蔵となり，現在は行方不明である。第三器は貞松・三代以降見えず，最近集成に別拓が現れた。第二器について頌齋続は「同文者有二爵一罍均蔵善齋。又禾鼎・作祖戊簋・觀作父戊卣・獻作父戊尊同有𠄎字，皆同出洛陽者也。」と言う。最近，集成は同銘の未著録の殷をもう一件挙げている（集成 2933）。但し，それには出土データはない。

- ・殷（5字+図象銘 D） 初出著録：貞松 4-41-2 出土データ：“近出雒陽”（貞松）
- ・殷（5字+図象銘 D） 初出著録：貞松 4-41-3 出土データ：“近出雒陽”（貞松）

祖戊を祀る，同銘二件，いずれも貞松に著録され，そこに「右器二同文，近年雒陽出土。」と言う。集成が二件挙げながら，前者について出土データを示さないのは杜撰である。

- ・殷（6字） 初出著録：貞松 4-43-1，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

初出著録である貞松に出土データも記される。貞松から二年後の欧華にパリス・ワットン商会の所蔵として載せられているから、早く海外へ渡ったものである。その後、陳氏の分類の時にはニューヨークのウィルソン・P・フォス氏の所蔵となっている（集成は「美国紐約沃森氏」の現蔵としているけれども、沃森は発音からすれば先のワットンのことであろうから古いデータである）。中日は単にニューヨークの個人所蔵としている。それが誰なのかは、従来のデータが古いので何とも言えない。

・殷（8字+図象銘） 初出著録：貞松4-44-3，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

・殷（8字+図象銘） 初出著録：貞松4-44-4，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

作器者は辨で、祖先文父己を祀る、同銘二件、いずれも貞松に著録され、そこに「右二器同文、近出雒陽。」と言う。善齋の所蔵を経て、現在は台湾、故宮博物院の収蔵になる（琖盛器）。本器には同銘の殷がさらにもう一件あって、録遺142（集成3716）に著録される。但し、その器については出土データもなく、器影も見られない。これも、先の作冊大方鼎の場合と同じく、一件だけがはぐれてしまっていて、羅振玉が貞松を執筆した時点でつかんでいた情報では二件しかないということであったのだろうか。三件同時の出土ではなかったのであろうか（しかしそれも考えがたい）。いささか疑問の残るところではある。上の例も含め、青銅器及びその出土に関する情報というものが、常に備わった形で伝わるものではないことを、あらためて感じるものである。

・殷（6字） 初出著録：貞松5-8-1，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

・殷（6字） 初出著録：貞松5-8-2，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

段金歸なる人物を作器者とする、同銘二件、いずれも貞松に著録され、そこ

に「右二器同文，近出雒陽。」と言う。林巳奈夫氏によると，前者は現在デンマークの国立博物館の収蔵である（林「歐洲博物館所見の中国古代青銅器若干について」『甲骨学』12，1980年。なお，集成はデンマーク，コペンハーゲンの某私人収蔵と言うも，誤りであろう。後者については不明である）。集成が，後者については「近出洛陽」と貞松の引用らしく示しながら（雒と洛の違いはある），前者について「伝出土于洛陽」と言うのは，全く解せない書き方であり，編集方針を疑わせる。ほぼ同銘の尊（貞松7-12-1）はaで取り上げた。

- ・ 殷（16字） 初出著録：貞松5-22-1，出土データ：“近出雒陽”（貞松）
- ・ 殷（16字） 初出著録：貞松5-22-2，出土データ：“近出雒陽”（貞松）
- ・ 殷（16字） 初出著録：貞松5-22-3，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

作器者は鬻なる人物であり，鬻殷と呼ばれる器である。同銘三件，いずれも貞松に著録され，そこに「右三器皆近出雒陽，見之都肆。」と言う。貞松は第一器は器蓋揃い，第二器と第三器は一銘ずつ（器とも蓋とも言わない）挙げてゐる。のち，貞松統にさらに器蓋揃いの一件と一銘の一件と（計三銘二件）とを挙げ，「右二器与集古遺文所著録三器均不同。」とのコメントをつけている。従って，貞松・貞松統には合計七銘が挙げられていることになる（なお，貞松統は出土については触れない）。分域編が「三器。又未見著録者一器，見市上。」と言い，合計四件の存在を指摘している。器蓋が全て揃えば四件八銘となるはずで，それらが全て揃って挙げられるのは三代が最初である。そしてその通りに今に伝わり，現在器蓋揃いのものが四件，うち二件は北京の故宮博物院の蔵，もう二件は台湾の故宮博物院の蔵であり，後者についてだけ器影が見られる。現在の材料から判明したのは，上の第二器（貞松5-22-2）は蓋であること，第三器（貞松5-22-3）は器であること，である。それらが原配である可能性もないとは言えないので，四件あるうち出土について確認される

(貞松のデータで)のは最低で二件、多ければ三件、ということになる。即ち、貞松続に器蓋揃いで現れるセットについてのみ出土データはない、ということである(従って、それは本稿では挙げられない)。

なお、善齋器は「所見簋四盤一匜一同出于洛陽。」と言い(善齋器77)合計六件の出土であると記す。そこに言う盤と匜も善齋の所蔵で善齋金に載せられており、それらについては、上の善齋器77の記述により、「洛陽出土」という扱いのみでaの中に入れてある。三件の殷の記事と合わせると「近出雒陽」ということになるけれども、本稿の原則からはそうはしない。また、善齋器の言う「簋四」が、セットを成す四件の意味であるのか、あるいは四銘の意味であるのかは判然としないので、最後に現れた貞松続の器も含めて全て洛陽出土とは取り扱わない。洛陽出土とされる青銅器は西周前期の器が多く、その中で本器らは例外的に中期の末から後期に属する。

- ・殷(106字+図象銘) 初出著録：貞松6—11, 出土データ：“近出雒陽”(貞松)
- ・殷(106字+図象銘) 初出著録：貞松6—12, 出土データ：“近出雒陽”(貞松)

作器者の名にちなんで矢令殷と呼ばれる器である。初出の貞松は、器蓋揃いのセットとして著録し、「此器近出雒陽，已隨市舶入歐洲。同時出土有鼎三，方尊・方彝各一及此，共六器。」とのデータを記している。鼎は前出の作册大方鼎，方尊・方彝は本器と同じ作器者の矢令方尊・方彝である。それに本器を加えて、合計六件が同時出土であると羅振玉は言うのである。本器に関する最も古い出土データであるけれども、本器は器蓋揃いのセットではなく、実は失(無)蓋の器二件なのであるから、根本的な所で誤りのある貞松の記述にどこまで信頼がおけるかはいささか疑問のあるところである。貞松の二年後の欧華は「河南省洛陽附近出土」とのデータを付し、パリのデヴィッド・ワイル氏の

蔵であると言う。しかしそこでは失（無）蓋の器一件のみを挙げているだけである。器蓋揃いのセットという説はその後も続き、小校・三代ともそのように記す。器二件であることが述べられるのは、梅原末治氏の「洛陽発見と伝へる一群の古銅器に就いて」（『美術研究』57, 1936年）があるいは最初であろう。そこで梅原氏は「巴里のダビッド・ワイル氏珍藏の有臺殷雙器」と記述しており、「雙器」というのであるから二件あることがここに示された。しかし写真も示されず、また失（無）蓋という点には触れない。ついで、河南贖稿に至って初めて、失（無）蓋の器二件であることが、柯昌済が見たという写真から確認された（但し、そこでも二件一緒に挙げられているというその写真が載せられているわけではない）。本器が失（無）蓋の器二件であることを、直接の実見に基づいて初めて断言したのは陳夢家の断代であり、1946年にニューヨークの一倉庫内で撮影等をしたと言う。両器の写真が出たのも断代が最初である。現在は二件ともパリのギメ美術館にあり、両器を並べた写真が『中国青銅器全集 西周1』五三に載っているので、本器が二件存在することはもはや疑う余地は全くない。

出土地点については、陳夢家が断代で「1929年、出土于洛陽邙山の馬坡。」と述べるのが、それ以前のデータを越えた具体的なものとして注意される。

・尊（21字＋図象銘） 初出著録：貞松7-18-1，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

作器者は鳴土卿なる人物である。貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。容庚氏はその洛陽出土というデータをなぜか採用しない（氏の善齋器・通考とも挙げていない）。

・尊（183字＋図象銘） 初出著録：貞松7-19，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

作器者の名にちなんで方尊と呼ばれる器である。貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。但し、既に方彝・殷を挙げたせいであろうか、貞松はこの方尊については「右方尊近出雒陽。」と言うだけである。同時出土とされるそれらの器群については別に稿を改めて考察する。

- ・壘（図象銘） 初出著録：貞松7—21—2，出土データ：“近出洛陽”（貞松）

貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。その後は三代に著録されたきりで、現在の収蔵なども一切不明である。

- ・卣（7字+図象銘D） 初出著録：貞松8—26—1，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。その後は三代に著録されたきりで、集成に別な拓が載せられているものの、現在の収蔵なども一切不明である。

- ・觶（1字） 初出著録：貞松9—10—3，出土データ：“近出雒陽”（貞松）

貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。その後は三代に著録されたきりで、現在の収蔵なども一切不明である。

- ・觶（図象銘D） 初出著録：貞松9—13—1，出土データ：“近雒陽出土”（貞松）

貞松に初めて著録され、出土データもそこに示される。善齋器は出土について何も触れていない。

- ・爵（図象銘D） 初出著録：貞松9—32—1，出土データ：“近出洛陽”（貞松）

松)

- ・爵（図象銘D） 初出著録：貞松9—32—2，出土データ：“近出洛陽”（貞松）

貞松に初めて著録され，出土データもそこに示され，「右二器同文，近出洛陽。」と言う。善齋金に載ったところまではわかっているものの，現在の所在などはわからない。

- ・爵（2字+図象銘D） 初出著録：貞松10—14—3，出土データ：“近出洛陽”（貞松）
- ・爵（2字+図象銘D） 初出著録：貞松10—14—4，出土データ：“近出洛陽”（貞松）

貞松に初めて著録され，出土データもそこに示される。前者は現在行方不明，後者は北京の故宮博物院の所蔵であるという。両器とも善齋金に著録されるが，そのいずれも銘文の拓が上下逆さまになっており，しかもご丁寧にも図の銘文部位（鑿下）にも上下逆さまに銘を書き入れている。不審と言えば不審ではあり，誤鑄の可能性もあり，また一方偽作の疑いもある。但し，書き入れる際の単純なミスとも考えられるので，あまり深く考えないでおく。

- ・爵（2字+図象銘C） 初出著録：貞松10—18—2，出土データ：“右二器近与辰父癸盃同出洛陽”（貞松）“河南洛陽馬坡”（集成）
- ・爵（2字+図象銘C） 初出著録：貞松10—18—3，出土データ：“右二器近与辰父癸盃同出洛陽”（貞松）“河南洛陽馬坡”（集成）

初出著録である貞松に，二件並べて上記のように言う。後者は善齋器にも載るものの，なぜか善齋器は出土データを示さない。通考は「同銘者四器，出于洛陽。」と言う。貞松が辰父癸盃即ち臣辰盃と同出であると言っているので，臣辰盃に関する出土データ（貞松にはない。貞松後の他の著録による）と総合

すれば、集成のように「河南洛陽馬坡」ということになる。

- ・鼎（8字） 初出著録：貞松補上9-1，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）
- ・鼎（8字） 初出著録：貞松補上9-2，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）

作器者は穆父なる人物である，同銘二件，いずれも貞松補に著録され，そこに「右二器近出洛陽，見之都市。」と言う。十二家は後者のみを著録しつつ，「同時出土凡二器，其一字畧大。」と記し，同出と言いながら出土地点については言わない。なお，同銘の両器ながら，十二家が言うようにサイズは異なっており，頌斎統によれば，尺寸で言うと後者は前者より六寸ほど小さい。しかし，いわゆる列鼎に属する類いのものであるまい。

- ・殷（5字+図象銘） 初出著録：貞松補上23-3，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）

貞松補に初めて著録され，出土データもそこに示される。その後は三代に著録されたきりであったが，集成に載り，現在は北京の故宮博物院の所蔵であることが明らかとなった。しかし，器影はいまだに見ることができない。

- ・殷蓋（149字） 初出著録：貞松補上29，出土データ：“近出洛陽”（貞松補）

作器者の名にちなんで，它殷（也殷・沈子殷）と呼ばれてきた器である。また銘文の難解なことでも知られる器である。初出の時点から存在したのは蓋だけで，器身はない。貞松補に初めて著録され，そこに「此殷近出洛陽。帰廬江劉氏善齋。」という。陳夢家氏の断代（五）は「曾蔵劉體智，後帰前中央博物館籌備處。」と言う。現在は，ベルギー・ブリュッセルの王立芸術歴史博物館

の所蔵であり、張光裕氏の「巴黎・布魯塞爾所見中国銅器選録」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第五十一本、1980年)は「它殷蓋原蔵秀水郭氏、後輒転為劉善斎所得、未知曾幾何時、已為歐人所有。」と言い、劉善斎以前に、秀水郭氏なるもう一人の収蔵の段階があったとする。陳夢家氏が言うように本器がもと前中央博物館籌備處にあったのであれば、どうして海外へ流出することとなったのか、確かに事情はよくわからない。陳氏の断代以降、収蔵についての情報が全くなく、ベルギーにあるということも近年になってようやく(しかも突然)判明したという状況である。出土地点については、貞松及び善斎器も洛陽出土としており、その後齟齬を来すような特に不審な情報もない。最近、李学勤氏が「1931年洛陽出土」とのデータを記すけれども、出所を明らかにし得ない(李「令方尊・方彝与成周的歴史地位」『洛陽考古四十年』科学出版社、1996年)。

- ・ 卣 (23字+図象銘) 初出著録：貞松補上34、貞松続中22、出土データ：“近出洛陽”(貞松補)

毓祖丁卣などと呼ばれてきた器である。本器はまず器種を尊と誤った形で貞松補に載り、その後、貞松続に改めて載せられ、「此器集古遺文補遺卷上著録誤作尊、又祇蓋銘。故重著之。」として器蓋両銘が掲げられている。しかし、その記述にも誤りがあり、貞松補が最初に尊として掲げたのは蓋銘ではなく器銘である。そして、拓本を見るならば、器銘はよいけれども、蓋銘は文字に不審な点が多く、後世の偽入の疑いもある。長い間行方不明であったが、杜迺松氏の「談毓祖丁卣等三件商代長銘銅器」(『文物』1984年第10期)に、北京故宮博物院の蔵であることが明らかにされ、同時にこれまで見ることはできなかった器影も載せられた(但し皮肉なことに、その図版を見ると、どうやら本器は杜氏が言うように殷代の器ではなく、西周に降るのではないかと推される)。出土データは、最初の(つまり誤りのあった)貞松補の方にのみ「近出洛陽」

とある。

- ・爵（2字） 初出著録：巖窟上 66，出土データ：“洛陽新出土”（巖窟）

初出は巖窟で出土データもそこにある。他の著録に一切見えず、近年集成に久しぶりに載せられた。集成によると、現在、北京の故宮博物院の所蔵であるという。鑿のない、変則的な爵である。

- ・卣（46字） 初出著録：断代（一） p.157，出土データ：“近年出土于河南（伝出于洛陽）”（断代）
- ・尊（46字） 初出著録：断代（一） 図版貳，出土データ：“近年出土于河南（伝出于洛陽）”（断代）

作器者の名にちなんで保卣・保尊と呼ばれる器であり、現在、保卣は上海博物館、保尊は河南省博物館の所蔵である。出土について、集成は、保卣は「1948年河南洛陽」とし、保尊は「洛陽」と記す。陳夢家氏の断代では「近年出土于河南（伝出于洛陽）」というのみで、具体的な年までは記さない。上海に至って「器為一九四八年河南省洛陽附近出土，共出者尚有一尊，銘同。」と言い、出土は1948年であるとする。一方の保尊についても、趙新来氏は「這件器物是1948年在洛陽市区發現的」と記す（「一件有歷史價值的青銅器——“保尊”」（『河南文博通訊』1980年第3期）。同銘の双器であるから、同じ場所から同時に出土したものと考えて当然よいけれども、両器についてそれぞれ同じデータがあるというよりも、一方のデータをもう一方にそのまま引き写しただけのような印象もないではない。

- ・卣（65字） 初出著録：断代（二） p.111，出土データ：“解放前伝洛陽出土”（断代）

断代に初めて著録され、ほぼ同時に録遺にも著録された。出土については断

代が上のように言うだけである。器影は目下のところ断代が掲げている不鮮明な写真が一枚あるだけである。

以上、「近年の洛陽出土というもの」についてひとつお見してきた。合計で44件、その全てが特にデータ上の不審のないものとして本稿が扱う対象となる。先に述べたように、「近年」とはその著録にとって近年ということであり、その意味では鄒華（1916年？）から断代（1955年）の「近年」では40年の差がある。しかしながら、ここに属する器の8割強が貞松（正・補、いずれも1931年）の所載であって、その意味からは、ほとんどが1920年代の後半の出土に係るものと見てよい。しかも注目すべきは、ここには同銘器群がいくつも含まれている、ということである。出土物がすぐには分散せず、まとまりを持ったままで所在を変えていった、そういう段階にデータが残され記録されたことは貴重であると言えよう。

d 出土年を明らかにしているもの

次に、出土地点については単に洛陽というのみながら、その出土した年を明記するものを挙げる。cの冒頭において触れたように、こうした限定的な情報は信頼性を高めるものではないかと思う。

・盃（45字+凶象銘B'C） 初出著録：貞松8—43，出土データ：“有臣辰盃者，聞於一九二九年冬，与矢令二器同出於洛陽”（郭沫若「臣辰盃銘考釈」）“案臣辰諸器民国十八年同出洛陽”（善齋器）“民国十七年洛陽出土”（通考）1929年冬洛陽出土（Freer 1967）

臣辰盃あるいは土上盃と呼ばれる器である。初出著録が貞松であるかどうかは判断しづらいところであり、郭沫若「臣辰盃銘考釈」『燕京学報』第九期

(1931年6月)があるいは先かもしれない。貞松には出土データはなく、郭氏が上のような出土データを記す。郭氏の「臣辰盃銘考釈」の冒頭に「有臣辰盃者、聞於一九二九年冬、与矢令二器同出於洛陽；同出者共有銅器三十餘事、惜已分散矣。」と言うのは、同出器群も含め、確実なデータとしては相当に古いものと言ってよい。上のデータでは、容庚氏の通考が一年早い出土年を記すけれども、その年を言うのは通考のみであるから、誤りであろう。器は、現在、アメリカ、ワシントンのフリーア美術館の所蔵であり、アクセション・ナンバーは33.2であるから、1933年にはもうそこに入っていたことになる。

- ・鼎（2字+図象銘A） 初出著録：貞松補上4-4，出土データ：“1929年洛陽出土”（集成）

貞松補に初めて著録されるけれども、出土データは記されず、そこでは「萍郷文氏寅齋蔵」と言うのみである。その後三代に載ったきり、今も行方不明の器であり、集成が載せる拓も三代のものである。即ち、三代以降、まさに本器については新資料を何も得ていないのであって、集成が上記のような出土データを掲げるのは、ひとえに銘文の図象銘Aの故であろうと考えられる。信頼性は薄いと言わねばならない。ここでは存疑としておく。

- ・鼎（2字+図象銘） 初出著録：貞松補上5-1，出土データ：“己巳出洛陽”（貞松補）

次の鼎とともに貞松補に著録され、「夂父戊鼎」の一・二として並べられている。但し、河南贖稿に両器とも器影が載っており、器形・紋様とも異なり、同銘の双器ということはこの場合あり得ない。貞松補が「右二鼎皆己巳出洛陽、河南博物館蔵。」というのは、単に銘文が同じという点（下のように疑問あり）だけに頼って付会したものではなく、他に根拠があるのか、遺憾ながら明らかにし得ない。ここに言う己巳は1929年のことであろう。他にも極めて多くの

青銅器が出土したとされる年である。なお、孫稚雛氏の『金文著録簡目』は、当然上の貞松補の文を見ていながら、次器についてのみ「洛陽出土」と記し、本器については記さない。集成は本器の現蔵について「河南省博物館？」と記し、正確な情報をつかんでいないようである。

- ・鼎（2字+凶象銘） 初出著録：貞松補上5—2，出土データ：“己巳出洛陽”（貞松補）

前述のように、貞松補に「夂父戊鼎」の二として著録されている。但し、本器の方は「戊」に当たるはずに字のところが欠けていて読むことができず、残っている筆劃からは少なくとも戊ではない可能性の方が高いと思われる。たとえ父戊ではないとしても、貞松補の示すデータとしては「己巳出洛陽，河南博物館蔵。」と言うことには変わりはなく、また、河南贖稿にも「洛陽出土，蔵河南博物館。」と記してある。集成によると本器は現在河南省博物館の蔵であるという。

- ・鼎（2字+凶象銘C） 初出著録：貞松補上7—2，出土データ：“己巳出洛陽”（貞松補）

初出著録である貞松補に「己巳出洛陽，河南博物館蔵。」というデータとともに載せられている。その状況は河南贖稿の段階も変わらず「洛陽出土，蔵河南博物館。」と記される。現蔵は不明であるらしい。

- ・鼎（21字+凶象銘） 初出著録：貞松補上11—1，出土データ：“己巳出洛陽”（貞松補）

作器者は嗣なる人物である。初出著録である貞松補に「己巳出洛陽，河南博物館蔵。」というデータとともに載せられている。その状況は河南贖稿の段階も変わらず「洛陽出土，蔵河南博物館。」と記される。現在は北京故宮博物院

の所蔵である。集成に備注として「器残破成六塊。」とあり、河南贖稿段階では一応形を成していたものが現在は崩壊してしまったということだろうか。初出以来の銘拓を見る限りでも銹回りも甚だしく、あるいは相当にダメージを負った状態で出土したのであろう。

- ・甗（図象銘） 初出著録：貞松補上17-1，出土データ：“己巳出洛陽”（貞松補）

初出著録である貞松補に「己巳出洛陽，河南博物館蔵。」というデータとともに載せられている。その後は三代に載せられたきりで，器影も見ることができず，現在は行方不明である。

- ・爵（図象銘A） 初出著録：貞松補中23-1，出土データ：“民国十七年出土于洛陽”（頌齋）“1938年河南洛陽市郊墓葬”（集成）

貞松補に初めて著録されるけれども，出土データは記されず，ここでは「東莞容氏蔵」と言うのみである。出土について最初に触れるのは頌齋であり，ひとまず上のように抜いておいたものの，実はこのように扱うことには問題があるかもしれない。頌齋は，器の尺寸・紋様・銹について述べ，それから「柱上銘一字，民国十七年出土于洛陽者凡二十餘器，鼎簋卣盃爵之有臣辰銘者皆是也。」と言う。本器が洛陽出土であると直接言っているようなないような，実はいささか微妙な言い方である（本器については何とも言えないが，同銘の器には洛陽出土のものがある，というくらいの意味にもとれる）。なお，頌齋の著者容庚氏は，通考でも頌齋と同じく民国十七年（=1928年）説を採るものの（通考上44頁），のち通論では「臣辰各器傳於1929年同出土於洛陽馬坡。」と言い，1年遅らせている。この年の方が他の著録とは合う。集成のデータにも疑問があり，1938年というのは1928年の誤りとしても，「洛陽市郊墓葬」というデータがどこから出てきたものか，明らかにし得ない。特に「墓

葬」と言っていることに何か根拠があるのであろうか。甚だ疑わしいと言わねばならない。

- ・ 卣（49字＋図象銘B'C'） 初出著録：金文叢考227，貞松統中23，出土データ：“聞於1929年冬，与矢令諸器同出於洛陽”（金文叢考）

現在、日本、白鶴美術館に収められている器である。銘文が初めて載ったのは貞松統であるけれども、出土情報はそれより早く金文叢考に載せられている。白鶴撰では単に「伝河南省洛陽出土」と言うのみで、かえって曖昧な情報になっている（但し、白鶴撰の英文ではSaid to found at Lo-yang, Honan Province in 1929と言う）。

- ・ 尊（存37字＋図象銘B'C'） 初出著録：白鶴4，两周録16，出土データ：“昭和4年の冬洛陽より出土したるもの”（白鶴）

臣辰尊ほかさまざまに呼ばれる器である。慣例に従い作器者の名から命名すべきであろうが、銘文からは作器者が土上と史寅との二人が有り得るので、土上尊と称するのも必ずしも適切ではない。同銘の器群として早くから注目を集めたものの一つであり、洛陽の出土であることも早くから言われている。この尊は銹回りが甚だしく、この器だけでは銘文を通読できない。大体読めるのが37字という見当である。同銘の卣がアメリカ、フォッグ美術館にあるが、それについては出土データは知られない。なお、本器は白鶴帖が初出著録であるかもしれないが、白鶴帖を見ることができなかつたので、確認していない。

- ・ 鼎（2字＋図象銘BC） 初出著録：貞松図上16，出土データ：“民国十七年，洛陽出土”（通考）“1929年洛陽馬坡出土”（集成）

初出の貞松図及びその次の三代はいずれもデータを記すことのない著録であり、通考が初めて上記の出土データを記す。集成はそれとくい違う年を記すけ

れども、同じ図象銘を持つ一群の器の出土年と合わせたのに相違なく、あまり意味のあるデータとは思われない。上記の数件と同様、信頼性は薄いと言わねばならない。なお、同銘の殷が二件ある（集成3522～23）けれども、それらには出土データはない。

- ・爵（図象銘） 初出著録：巖窟上29，出土データ：“河南洛陽二十七年出土”（巖窟）

初出の巖窟に出土データとともに著録される。集成によると現在は北京の故宮博物院の収蔵になるという。

- ・爵（2字+図象銘） 初出著録：巖窟上35，出土データ：“河南洛陽二十九年新出土”（巖窟）

- * 爵（2字+図象銘） 初出著録：巖窟上35（説明），出土データ：“成対同坑出土茲録其一”（巖窟）

初出の巖窟に出土データとともに著録される。集成によると、現在は日本、大阪の個人の蔵になるらしい。巖窟の説明文によれば、同銘二件の双器であり、未著録ながらも一件もここに列しておく。

- ・爵（2字+図象銘A） 初出著録：巖窟上41，出土データ：“河南洛陽二十八年新出土”（巖窟）

初出の巖窟に出土データとともに著録される。現在は行方不明である。集成は同銘の爵をさらに三件挙げる（集成8386～88）けれども、それらには出土データはない。なお、以上、巖窟所載の4件は、いずれも1930年代後半の出土ということになる。洛陽から青銅器が出土したピークが1920年代後半であるので、それからほぼ10年後の出土ということになる。そして、そのころの洛陽出土器を掲げる著録は実はこの巖窟のみに限られる。データに何か不審な

点を感じないこともない。

・爵（2字＋図象銘） 初出著録：中日8—1029，出土データ：“伝1927年前
河南洛陽市”（集成）

中日に初めて著録され、現在カナダ、ロイヤルオンタリオ博物館の収蔵になるという。但し、中日は自ら初出であることを明らかにし（“未見著録”），そしてそこには出土データは記されていない。集成は何に基づいて上記の出土データを示すのであろうか。集成の拓は「考古研究所蔵陳夢家拓本」によるとなっている。陳氏は、1944年から渡米し欧州訪問を経て1947年秋に帰国しており、その間に欧米の所蔵になる殷周青銅器を調査している（周永珍「懐念陳夢家先生」『考古』1981年第5期）。集成の掲げる拓本は、陳氏がこの調査時に得たものであろうし、それに出土データも付載されていたのであろうか。但しそれも考えにくい気もする。

以上、「出土年を明らかにしているもの」についてひとつお見してきた。合計16件、そのうちデータが疑わしいものが2件あり、それらを除いた14件が、扱う対象となる。ここに挙げられた器の約半数は1929年の出土であり、次に見ていく「さらに詳細な出土地点を言うもの」のうちにもその年の出土であることを言うものが多い。これはこの年に特に盗掘が頻繁であったということではなく、かなり多数の器を含んだ窖蔵が見つかったことによるものであるらしい。それらはしかし直ちに分散して市場に出回ることとなり（特に欧米にわたったものが目に付く）、その時に一括出土した器群が必ずしも正確に記録され残されなかったことは大変遺憾であると言わねばならない。

e さらに詳細な出土地点をいうもの

a～dまでは、地点については洛陽（及び近郊）出土とだけされるものであった。ここでは、洛陽の中でもさらに具体的に地点を特定して情報を提供しているものを集めた。以下に明らかなように、特定地点としては馬坡の名を挙げることがほとんどで、その意味からは「さらに詳細な出土地点」と言いつつも、実際には出てくる地点名はほんの1～2カ所に限られる。

- ・殷（2字+図象銘A） 初出著録：貞松4-30-3，出土データ：“伝洛陽馬坡出土”（集成）

初出著録の貞松及びその後の著録にも出土データは示されず、集成になって初めて上記の記述が見られる。具体的な根拠があってそのように記したのかどうか、これまでのいくつかの例と同様疑わしい。おそらくは伝洛陽出土青銅器によく見られる図象銘Aが銘文に含まれることから与えられたものであろう。したがって、存疑としておく。

- ・貞（3字+図象銘C） 初出著録：欧華1-84，出土データ：“河南省洛陽附近出土”（欧華）“洛陽出土”（河南贖稿）1929年，洛陽馬坡（分類）“約1929年洛陽馬坡”（集成）

初出著録である欧華に上記のような出土データが示されている。「洛陽附近」と言い、あいまいさを残す。その後、分類に至って、臣辰盃に関わって本器も並べられ、1929年河南省洛陽馬坡出土と特定されるのである。本器については、初めから洛陽出土であることが言われており、欧華の「洛陽附近」という曖昧さも、むしろ馬坡の出土であることを暗示するかのようでもある。本器はあるいはbの「洛陽近郊というもの」という分類に属さしめるべきかとも見

られようが、bの「洛陽近郊というもの」はデータがそれ以上を出ないものであったから、本器はそれらと区別し、漠然から具体への展開と見て、ここに入れておく。

- ・殷(2字+図象銘A) 初出著録：善齋金8—18, 出土データ：“伝出于洛陽馬坡”(集成)

初出著録の善齋金及びその後の著録にも出土データは示されず、集成になって初めて上記の記述が見られる。具体的な根拠があってそのように記したのかどうか、これまでのいくつかの例と同様疑わしい。おそらくは図象銘Aが銘文に含まれることから与えられたものであろう。存疑としておく。

- ・盤(2字+図象銘) 初出著録：善齋金9—50, 出土データ：馬坡(White 1956), “伝1931年河南洛陽馬坡”(集成)

初出著録である善齋金には出土データはなく、のち、White 1956に至って、器がカナダのロイヤルオンタリオ博物館にあること、及び本器が洛陽馬坡出土であることが明らかにされた。集成の示す1931年というデータは何に基づくのかわからない(White 1956にはない)。

- ・爵(2字+図象銘C) 初出著録：貞松統下17—2, 出土データ：“河南洛陽馬坡”(集成)

- ・爵(2字+図象銘C) 初出著録：貞松統下17—3, 出土データ：“河南洛陽馬坡”(集成)

初出著録である貞松統には出土データはなく、集成になって初めて上記の記述が見られる。但し、具体的な根拠があってそのように記すのかどうかは、これまでのいくつかの例と同様疑わしい。おそらくは図象銘Cの存在によるものであろう。存疑としておく。二件とも現在は上海博物館の収蔵になる。

- ・殷（3字+図象銘A） 初出著録：続殷文存上40—4，出土データ：“1929年河南省洛陽馬坡（集成）

初出著録である続殷文存には出土データは示されず，最初に出土地点について記すのは分類であろう。但し，それは例の臣辰盃に関わって銘文上関係ある諸器を集めた箇所での言及であって，まさに本器自身について出土データがあるということとは別である。上記の例と同様，集成はおそらくそれに頼ったものであろう。存疑としておく。

- ・貞（2字+図象銘C'） 初出著録：十二家 尊15～16，出土データ：“約1929年，洛陽馬坡”（集成）

初出著録である十二家及び六年後の通考は出土データを示さず，その後，分類に至って，臣辰盃に関わって，1929年河南省洛陽馬坡出土の諸器の中に本器も並べられた。まさに本器自身について出土データがあるというのではないというその当たりの事情は上器と同じである。存疑としておく。

- ・鼎（2字+図象銘B'C'） 初出著録：小校2—39—1，出土データ：伝1929年洛陽馬坡出土（分類）

初出著録である小校は出土データを示さず，その後，分類に至って，臣辰盃に関わって，1929年河南省洛陽馬坡出土の諸器の中に本器も並べられた。まさに本器自身について出土データがあるというのではないというその当たりの事情は上器と同じである。存疑としておく。

- ・尊（12字） 初出著録：河南贖稿38，出土データ：“河南出土”（河南贖稿）
“拋懷履光説，守宮諸器与臣辰組都是1929年在洛陽馬坡出土的。”（分類）

初出の河南贖稿は，出土地点については「河南出土」と曖昧だが，その一方で「同時出土者尚有觥觥一，与此同銘。」というデータを載せる。のちに分類

がホワイトの言によってさらに詳しいデータを示した。もとアメリカのサンフランシスコ・ブランデーコレクションにあり、現在はイギリスのフィッツウィリアム博物館の所蔵であるという（集成のデータ。未確認）。

- ・卣 (10 字) 初出著録：分類 A 612 R 325, 出土データ：“拋懷履光説，守宮諸器与臣辰組都是 1929 年在洛陽馬坡出土的。”（分類）

初出著録である分類に、ホワイト（懷履光）の説として上記の出土データも示される。現在、アメリカのフォッグ美術館の所蔵で、そのアクセッション・ナンバー（Fogg: 1944・57・10）からすれば、フォッグが入手したのは 1944 年ということになる。

- ・殷 (2 字+図象銘 A) 初出著録：Rietberg Fig. 12 a, 出土データ：“伝洛陽馬坡出土”（集成）

初出著録は未見，集成によった。スイス，チューリッヒ，Rietberg 博物館の所蔵であるという。集成が示すデータはあるいは初出著録にあるのであろうか，不明である。なお，本器は，陳夢家が，分類 A 331 の項に父乙組 (31) von der Heydt, 断代 (二) 土上盃の項に 31 殷 (馮德德)，として挙げるものであろう。そこでは器影も拓もない。

- ・鼎 (2 字+図象銘 BC) 初出著録：集成 2116, 出土データ：“伝 1929 年洛陽馬坡出土”（集成）

集成に初めて著録され，上記のような出土データが示される。但し，それが疑わしいことは上のいくつかの例と同じである。存疑としておく。器は，現在，北京の中国歴史博物館の所蔵であり，集成とは別の拓及び器影が『中国歴史博物館藏法書大観 第一卷 甲骨文 金文一』（柳原書店，1994 年）に載せられている。

- ・ 卣（2字+図象銘C'） 初出著録：集成5149，出土データ：“約1929年洛陽馬坡”（集成）
- ・ 卣（2字+図象銘C） 初出著録：集成5151，出土データ：“約1929年洛陽馬坡”（集成）

集成に初めて著録され、上記のような出土データが示される。但し、それが疑わしいことは上のいくつかの例と同じである。存疑としておく。現在、北京の故宮博物院の所蔵である。

- ・ 盤（図象銘B'C'） 初出著録：White 1956 p.140—1，出土データ：洛陽邙山馬坡（White 1956）
- ・ 盃（図象銘B'C'） 初出著録：White 1956 p.140—2，出土データ：洛陽邙山馬坡（White 1956）
- ・ 殷（図象銘BC） 初出著録：White 1956 p.140—3，出土データ：洛陽邙山馬坡（White 1956）
- ・ 鼎（図象銘BC） 初出著録：White 1956 p.140—4，出土データ：洛陽邙山馬坡（White 1956）

以上四件とも The CH' EN-CH' EN SET（臣辰組）として初めて White 1956 に著録され、出土データもそこに記される。いずれも大体1932年までに骨董商がホワイトのもとへ持ち込んだもので、現在はカナダ、ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。

- ・ 卣（図象銘C'） 初出著録：White 1956 p.140—5，出土データ：邙山？（White 1956）“約1929年洛陽馬坡”（集成）

本器は上の The CH'EN-CH'EN SET（臣辰組）の補として初めて White 1956 に著録され、同じく現在はカナダ、ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。White 1956 によれば、本器はホワイトが開封にいる時に持ち込まれた

もので、器は甚だしく壊れていたが、蓋の銘文は無事であったという。White 1956 の記述によれば、本器の出土地点は実は必ずしも明らかではないのであって、集成がおそらく臣辰組の出土地点を踏まえて「約 1929 年洛陽馬坡」としたのは疑問が残る。

- ・殷（32 字） 初出著録：貞松 5—40—2，出土データ：“器出洛陽北十二三里許之邙山廟溝，其中有十四器”（両周）洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・殷（32 字） 初出著録：貞松 5—41—1，出土データ：“器出洛陽北十二三里許之邙山廟溝，其中有十四器”（両周）洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

作器者の名にちなんで競殷と呼ばれる器である。初出著録の貞松は器蓋揃いの一セットとして著録するけれどもそれは誤りで、実は無蓋の二件である。現在はカナダ、ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。White 1956 によれば、本器は、1927 年、北京にいたホワイトのもとに開封からの骨董商が持って来たものだという。White 1956 では THE MANG SHAN SET として同じ作器者（競）の一群の器の中に入れられている。それら競の青銅器について、陳夢家氏の断代は、「競組銅器，応出于一墓。因系盜掘，出土後分散，其大部分入開封蘭估手，転為懷履特所得，別有二殷（即両周図 64 所録者）運至北京後亦為懷氏所得。」と言い、骨董商の名も明らかにしている。陳氏が独自に入手した情報であろう。こうした状況からすると、これら二件の殷が他の器と同時に洛陽邙山廟溝（馬溝）から出土したものであるか否かは、若干の疑いを挟む余地もないわけではない。但し、陳氏が墓葬からの出土としたのは正しいのであろうか、これも疑問がないわけではない。なお、本器も含む競の諸器については、浅原達郎氏の「競卣」（『泉屋博古館紀要』第一巻，1984 年）が有益な考察を提供している。

- ・ 卣（5字） 初出著録：両周 録37，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

初出著録の大系は拓を挙げるのみで，出土データについての記載はない。器影も含めてデータが揃うのは White 1956 である。本器は後述の THE MANG SHAN SET の一で，1926年初秋にホワイトの元へ持ち込まれたもので，墓葬からではなく，窖中に不規則に埋められていたものであったという。器は，現在もカナダ，ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。

- ・ 甗（3字） 初出著録：両周 録37，出土データ：“器出洛陽北十二三里許之邙山廟溝，其中有十四器”（両周）洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

初出著録の両周は，本器については上の競設の附録に挙げるのみで，出土データは設に関する部分に書かれているものを採った。本器も後述の THE MANG SHAN SET の一で，状況は上の卣と同様である。なお，三代は器名を「乍父乙甗」とするけれども，読み損ないであろう。

- ・ 尊（5字） 初出著録：三代 11-18-4，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

初出著録の三代には出土データはなく，器影も含めてデータが揃うのは White 1956 である。以下，上の卣・甗と同様である。

- ・ 盃（4字） 初出著録：White 1956 p.119-1，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

- ・ 尊（5字） 初出著録：White 1956 p.120-2，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

- ・ 觚（無銘） 初出著録：White 1956 p.120-4，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

- ・觚（無銘） 初出著録：White 1956 p.120—5，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・爵（2字） 初出著録：White 1956 p.120—6，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

- ・爵（2字） 初出著録：White 1956 p.120—7，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・鬲（4字） 初出著録：White 1956 p.121—11，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・鬲（4字） 初出著録：White 1956 p.121—12，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・盤（3字） 初出著録：White 1956 p.121—13，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）
- ・鼎（4字） 初出著録：White 1956 p.122—14，出土データ：洛陽邙山廟溝（馬溝）（White 1956）

以上の器は White 1956 に初めて現れ，出土データ・器影ともどもそこに載る。THE MANG SHAN SET に属し，1926 年初秋にホワイトの元へ持ち込まれたものである。いずれも墓葬からではなく，窖中に不規則に埋められていたものであったという。器は，現在もカナダ，ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。セットとしては，直前に触れた両周 37 所載の卣と甗の二件をも加えねばならない。

- ・爵（2字） 初出著録：集成 7881，出土データ：“1926 年河南洛陽市邙山苗溝”（集成）

集成に初めて現れ，出土データもそこに載る。もとホワイトの蔵で，現在はカナダ，ロイヤルオンタリオ博物館の所蔵になる。器影は見られず，また上の出土データなるものもその根拠を明らかにしがたい。苗溝は廟溝であろう。直

前の器群と同出であると言いたいのであろうか。また、拓本も甚だ不鮮明で、「父乙」と読めるようでもあり読めないようでもあり、何とも言えない。

- ・觶（2字+図象銘） 初出著録：Lochow II p.25～，出土データ：河南省古洛陽府黃河南岸の新出（Lochow II）

初出著録のLochow（鏡齋吉金録）に出土データとともに載る。そこに言う出土地点は具体的にはどのあたりを指すのか、よくわからない。あるいは孟津にまで迫るものであろうか。ひとまずここに列しておく。器は、現在、ドイツ、ケルンの東アジア芸術博物館の収蔵になる（『歐洲所蔵中国青銅器遺珠』32）。

- ・卣（5字） 初出著録：白鶴撰24，出土データ：“伝河南省洛陽郊外北窯鎮出土”（白鶴撰）

初出著録であるに白鶴撰に出土データとともに載る。地点としてはかなり具体的である。

- ・甗（6字） 初出著録：文物資料叢刊（三）p.42～45，出土データ：1948年，洛陽馬坡東北欄駕溝（文物資料叢刊）

初出著録に上のようなデータが記される。いわゆる徴集品で、これ以上のことは全くわからない。

以上、「さらに詳細な出土地点を言うもの」について触れてきた。合計で39件、疑わしいものが10件あり、それらを除いた29件が今後の扱う対象となる。ここで言う詳細な出土地点は、邙山というものが殆どで、さらに詳しくは馬坡と廟溝（馬溝）とがとりわけ多く見える。多数の器を含んだ窖蔵の発見がこうした結果の原因となったことは先にも触れたとおりである。初出段階ではわからず、後に馬坡出土というデータが加えられた器を含めるとさらにその数は増

大する。

なお、ここでは合計 39 件に対し疑わしいものが 10 件とその比重が高い。初出以来長らく出土データが知られず、最近の『殷周金文集成』に至って初めて出土データが現れたものは全てそれに当たる。A (A') ~ C (C') の特定図象銘を持つものばかりであるということ、出土以来相当に時間がたち、出土に際しての事情を知る関係者がもはや残っていないであろう現段階において急に現れたデータであること、からすれば、やはりそれらを存疑とすべきことは致し方のないところであろうかと思う。

f 他の器との関連情報をもつもの

ここでは、まさにその器自身について出土情報が示されるという形ではなく、他の器に関する出土情報に関連してそれが示されるような場合を集めた。さらにわかりやすく言い換えれば、次のようになる。器 B について「B は A と同出である」とだけ、著録には記載が残されていて、そこには「洛陽出土」とはなない。しかし、A について（同一ないし他の）著録に「洛陽出土」とのデータがあれば、先の記載と合わせれば当然 B も A と同様洛陽出土ということになる。ここはそういうケースの B に当たる器を集めたのである。

- ・尊（65 字） 初出著録：撫古三之一・六五，出土データ：貞と対で洛陽から同出か（断代）

作器者は效という人物で、その名をとって效尊と呼ばれる器である。初出は古く十九世紀中葉で、同銘の貞があり、出土データはそれと関連して論じられ、本器（尊）について独自の出土データを言うものはない。貞については a において言及した。即ち、貞については「得之河南」（撫古録）とか「器出洛陽市」（綴遺）という情報が残っており、そこから本器についても同様の説を当

てはめる例が見られる。そこでひとまずここに列しておく。断代が「当出土于河南境内、或即洛陽所出。」(貞の項)というのは、だいたい上記の情報を折衷したものである。但し、それでよいのかという疑問は付きまとうのであって、積極的に洛陽出土と認定し得る根拠には乏しいとすべきであろう。

- ・殷(2字) 初出著録：貞松統上29—2, 出土データ：“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・貞・盃・尊・觚各一。”(通考)
- ・貞(2字) 初出著録：貞松統中13—3, 出土データ：“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・貞・盃・尊・觚各一。”(通考)
- ・殷(2字) 初出著録：貞松統中24—4, 出土データ：“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・貞・盃・尊・觚各一。”(通考)

いずれも「魚從」なる銘文を持つ器で、同銘の鼎・盤・尊・觚については前述した。ここに挙げた殷・貞・盃については、それら個々には出土データを記すものではなく、通考が上に掲げたような出土データを示す。同銘の器群の同時出土を言うものである。なお、最近、集成は同銘の殷をもう1件著録している(集成3129)。これまで未著録の器で、要は存在そのものが知られなかったものである。通考の示すデータによれば殷(簋)は「同出洛陽同銘」器中1件のはずであるから、あるいは別の時期に出土したものであろうか。あるいは通考の示すデータも不十分であったのであろうか。cで挙げた作冊大方鼎及び鬲殷の例と同様、当初のデータから漏れた1件が後から出現する例である。特に不審とすべきものではないと思われる。但し、その集成3129については、それ自身に出土データはなく、上の通考のデータにも含み得ないのでここでは扱う対象から除外することとなる。

- ・殷(1字) 初出著録：貞松4—26, 出土データ：“(出于洛陽)同銘者有遽簋。又遽從鼎五器、及遽從甗・遽父己貞・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者

- 也。”（頌齋統）
- ・犧尊（2字+囟象銘） 初出著録：貞松7—5，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）

 - ・卣（2字+囟象銘） 初出著録：貞松8—9，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・解（2字+囟象銘） 初出著録：貞松9—18，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・鼎（2字） 初出著録：貞松統上11，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從我甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・鼎（2字） 初出著録：貞松統上11，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・鼎（2字） 初出著録：貞松統上11，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・甗（2字） 初出著録：貞松統上27，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・鼎（2字） 初出著録：三代2—14—6，出土データ：“（出于洛陽）同銘者有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽解皆同出者也。”（頌齋統）
 - ・鼎（2字） 初出著録：三代2—14—7，出土データ：“（出于洛陽）同銘者

有遽簋。又遽從鼎五器，及遽從甗・遽父己卣・遽父己犧尊・父乙遽罍皆同出者也。”（頌齋統）

これらは「遽」を内に含む銘文を持つことで共通する一群の器である。但し、「遽+祖先名」という形の銘文が3件あって、そこにおける「遽」は文字としての用法ではなく、図象銘として用いられていると判断し、（2字 [=祖先名]+図象銘 [=遽]）として表記してある。その意味では、1字は（図象銘）、2字は（1字+図象銘）とすべきかもしれない。出土データは頌齋統68の項に書かれているもので、必ずしも個々に出土データを記しているものがあるわけではない。先の魚従の器群と同様、同銘の器群の同時出土を言うものである。

・方鼎（40字+図象銘） 初出著録：断代（三）p.84～5，出土データ：“此鼎与令器同出”（断代）

例の作册大方鼎の第四器である。これ一件のみ、他の三件とは離れて著録されたという経緯があるので、ここに列しておく。出土については他の三器の項を参照のこと。

以上、他の器との関連情報を持つものについて見てきた。合計15件ほどあるものの、魚従と「遽」関係ではほぼ埋まっている状態である。金文著録の編纂の体例としては、器種の別にしたがって器を並べていくのが通例であり、したがって、同じ銘文を持つ器群があろうとも器種が違えば離れ離れの位置に置かれてしまうこととなる。その際、その器群の全てについて同出器あるいは同銘器を記しておくとは限らない。要は、上の例はそうした事情によって生じてきたものである。各器それぞれに出土データが必ずしもそろっていないとはいっても、疑わしいということとは異なる。

g 異説のあるもの

ここでは、出土地点について異なる説が存在するものを集めた。「異なる」とは、安陽と洛陽といったように明らかに別の地点を言う場合を指し、「河南出土」と「洛陽出土」といったように広さの問題（あるいは曖昧であったのが具体的になった）は異なる説であるとは見なさない。

- ・爵（3字+図象銘） 初出著録：攀古下 31，出土データ：“此器与匱侯盃同出京師郊外”（綴遺）“河南洛陽市馬坡”（集成）

初出著録である攀古には出土データはなく、綴遺が初めて上記のデータを示した。このデータが正しいとすると、本器是北京郊外の出土ということになる。そして、同出の匱侯盃については確かに北京の出土の可能性が高いと思われるので、綴遺の情報は信頼できるとと思われる。従って、「河南洛陽市馬坡」なる集成のデータは何らかの誤りであろうと判断する。

- ・鼎（2字） 初出著録：貞松補上 6—1，出土データ：“往歲出洛陽”（貞松補）“河南彰德出土”（三代表）

初出著録である貞松補は洛陽出土と言い、三代表は河南彰德出土と言う。後者のデータによると要は殷墟出土ということになる。本器は、現在、アメリカ、プリンストン大学の所蔵になり、器影（林『綜覧図版』鼎 65）によると、殷代のものと判断される。今後の検討の結論を先取りするようであるが、洛陽出土青銅器には殷代の器は殆ど無いという傾向があり、本器も河南彰德出土、即ち殷墟出土という方がまだ可能性が高いと思われ、初出著録に洛陽出土を言うものではあるけれども、信頼性は薄いと判断する。

- ・不明(図象銘) 初出著録：貞松補上19—2，出土データ：“出洛陽”(貞松補)“河南彰徳出土”(簡目)

初出著録である貞松補は洛陽出土とし、簡目は河南彰徳即ち殷墟の出土とする。本器はそもそも器種が特定できず、集成は「戈車器」とするくらいである。簡目は本器を簋(殷)として扱い、さらに上記のデータを示すのである。この場合、判断の材料は他にはない。疑問多し、ということにしておきたい。

- ・壺(3字) 初出著録：白鶴撰21，出土データ：“伝河南洛陽出土”(白鶴撰)“安陽の出土”(日華)“伝河南洛陽市”(集成)

初出の白鶴撰は洛陽出土と言うが、日華が同じく白鶴所蔵の有蓋爵とともに安陽の出土であると言っている。本器は西周中期以降に属し、器の年代から言えば安陽の出土などとは全くあり得ないと判断される。何らかの誤りであろう。一方の洛陽出土というデータについては特に不審もないが確証もない。

- ・方彝(12字) 初出著録：文物62—1 p.56，出土データ：洛陽市馬坡村南(文物)洛陽市孟津李家村(張劍)

最初文物に著録された時には「洛陽市馬坡村南」とのデータが付され、のち、張劍氏がさらに調査をして別の地点の出土であるとの情報を明らかにした(張劍「叔牝方彝考釈」『中原文物』1983年特刊)。調査結果は以下のようなものである。「得知方彝是一九四七年秋出在小李村西南半里地的一座古墓之中，此墓為近方形的豎穴土坑，長3.5，寬3，距地表4米，墓室東・西・北三面有高約70厘米的二層台，中部為椁室，棺底有很厚的朱砂，底部正中有長方形的腰坑。」場所は洛陽市馬坡村ではなく、孟津県の李家村(上の文中に小李村というのは誤りか)で、それも墓葬からの出土で、しかもそれは1947年秋のことであるという。これは1982年8月に何度も訪問調査をしてわかったのであると張劍氏は言う。それにしても35年後の調査であり、どれほど信頼がおき得るかは些

か疑問があるとはいえ、このデータを尊重しておきたい。とすると、本稿が扱う地域からはみ出してしまうこととなり、対象から外さねばならぬこととなる。そこで、以下、本器は検討から除外する。

以上、異説のあるものとしては5件を挙げ、4件までを除外、残る1件は存疑としておいた。但し、存疑の1件も信頼性があるわけではない。二つある情報のうち、一方があまりにも明白な誤りで、もう一方が残ったに過ぎない。その意味では5件全てを除外としても差し支えはないほどである。

以上で全ての器についてのひとまずの検討を終えた。何らかの形で洛陽出土とのデータを持つ青銅器は、合計209件あり、存疑22件と除外11件を除き、残ったのは176件ということになり、これらが今後取り扱う対象となるのである。約16%ほどが対象から外され、従来に比して、材料は数は減ってしまったけれども、その信頼性についてはいささか高まるのではないかと考えるものである。

a～gまで分類を行って、著録それ自身の示すデータが信頼し得るかいなか、ということに関する検討をここまでしてきたのである。各器が誰によってどういう形で発見されたかということは、結局は偶然によるものでしかなく、それ故、各器がどこに分類されるかについては、各器自体の本質とは実は何の関係もない。eは信頼性が高くaは信頼性が薄いかといったことは、以上の結果とは無縁の判断である。要は、ここまで行ってきたことは、言ってみれば「第一次書類審査」ということになろう。器の本質については、今後検討していくものである。

四 洛陽出土伝世品青銅器に関する若干の知見

前章においては、洛陽出土との情報を持つ青銅器を集成し、肝腎の「洛陽出土」という情報が信頼するに足るものであるかどうか、検討を試みた。何よりも重要なその情報に関しては、当然、これは一度試みる必要がある作業であった。本来は、各器について、その掲載されている著録全ての記事を並べてゆくべきであろうけれども、それは余りにも煩瑣であり紙幅をとることもあるから、ここでは当面必要な所だけに絞っておいた。それでもこのように大変煩瑣な記述となってしまった。しかしながら、ここまでの検討により、洛陽出土とのデータを持つ伝世品青銅器がひとまずのふるいにかけられたことになる。しかしながら、こうした作業を経つつも、あらためてここで確認しておかねばならないのは、表1から「存疑」と「除外」とを取り去った残りの青銅器が全て確実に洛陽出土であるとはやはり限らないということである。結局これまでの作業は、著録に表れてくる際の不審をとらえてそれによって排除したものであり、著録の記述に積極的に疑いを抱くことができない場合には、排除すべき理由がないため、それらはそのまま素通りしてきているのである。したがって、表1で「存疑」と「除外」とを取り去った残りの器群を正しく表現すれば、「洛陽出土とのデータを持ち、そのデータが不審であるとして否定することが必ずしもできない器群」という程度にしかならない。しかし、以後、それらの器群が「洛陽出土青銅器（伝世品）」であり、これを主な検討対象としてゆくのである。その検討の過程の中で、これらの器群に何らかの傾向が看取されれば、それを基準として「洛陽出土」というデータはさらに吟味されることとなる。さらに、近年の考古学的発掘により得られた確実な洛陽出土青銅器を集成・検討し、そこから得られた知見によっても、伝世品の結果はあらためて吟味されることとなる。要は、データの検討は今後もさらに続き、むしろこれか

ら本格的に行われることとなる。

こうしてまず対象となる資料が整った。器及び銘文の検討が、次稿での主な作業となる。なお、洛陽出土青銅器が世に現れてくる時期、それらを多く掲載する著録、著録の掲げる情報の信頼性、といった点について、ある程度の傾向があることは比較的明らかであるから、本稿の末尾に、出土情報の現れ方について若干触れておこう。

まず、洛陽から殷周青銅器が発掘される時期について述べる。宋代著録の『考古図』にたった三件ではあるものの洛陽出土とする器が載せられていることは、やはり注目しておいてよいことである。科学的な発掘が始まるのはか以前、殷周青銅器の出土地も必ずしもまだ充分な傾向が知られない時期に、つまり殷周青銅器の出土地を適当に安陽だ陝西省だと付会することが必ずしも可能ではない時期に、「洛陽出土」という情報がそこにあることは、信頼性ということからは高いとしてよいと考えるのである。但し、それ以降、宋～元～明～清と洛陽から殷周青銅器が陸続と発見されるということにはならなかった。むしろ、1920年代、それもその後半を大きなピークとして、殷周青銅器は一気に大量に洛陽から発見されるようになった、ということが明らかに見て取れるのである。勿論、そこには留保すべき点が二つある。一つは、宋代以来、青銅器の出土地点にそもそも必ずしも充分に関心が払われてこなかったこと、もう一つは金文著録（青銅器著録）の体例として出土地点を初めとする情報が必ずしも書き留められてきたわけではなかったこと、である。この二点を踏まえれば、実のところ、洛陽出土青銅器はここまでに掲げた数に止まるものではない、とすべきであろう。一方では、洛陽から大量の青銅器が出土することがわかってから、他の地点で出土した青銅器について「洛陽出土」とのデータを付会した例も当然存在しよう。但し、洛陽から青銅器が大量に出土するのは1920年代後半であり、それ以後、「洛陽出土」とされる青銅器の著録への登場は実はさして多くない。そのことから考えると、非洛陽出土器が洛陽出土器と

された例は必ずしも多くはないと考えられ、むしろ、実際には洛陽から出土したのにそのデータが残されなかった器の方が多いのではないかと予想される(本稿で「存疑」とされた器は実はそれに属すると予想される)。したがって、今後行う考察も洛陽出土青銅器の全てを対象としての考察ではなく、部分的なものであるという留保を差し挟んでおかねばならない(しかし、かなりの部分が以上の中に含まれているのではないかと、とも思う)。

1920年代の河南省は社会が非常に混乱していた時期にあった。そのことは、安陽殷墟の発掘に関して伝えられるさまざまな苦労の物語の中からも充分にうかがうことができる。河南省の中でも洛陽は盗掘が猖獗を極めた場所であり、西周に限らず、北魏などの遺跡もだいたい被害に遭っている。『燕京学報』第二期(1937年6月)の「国内学術界消息」にも「豫省洛陽龍門輝県古物多被盜掘」と題してその様子が報告されており、洛陽では西周青銅器が多数出土したと言われる邙山あたりの盗掘が甚だしいことをリアルに記している。そうした状況を受ける形で(と言ってよいであろう)、1930年代にはいくつもの金文ないし青銅器著録が公刊された。本稿が頻繁に用いた『頌齋吉金統録』『善齋彝器図録』『十二家吉金図録』はまさにその典型であり、写真や拓本が揃っていることはもとより、器に関するデータがある点でも貴重である(これら三種は収蔵家を単位として編纂されており、そうした趣旨では『尊古齋所見吉金図集』『貞松堂吉金図』もあるけれどもそれらにはデータがなく、今回のテーマでは有効ではなかった)。もともと、各地方出土(存在)の金石遺物を集めた金石志の類は多く出ていたが、この時期、出土地点に注目し、殷墟出土物のみを集めて写真と拓を付した『鄴中片羽』が公刊されており、その流れで『河南吉金図志贖稿』なる本も編まれている。そこに述べられる出土データにはいささかあやふやな部分もあるけれども、河南省からいかに多くの青銅器が出土した(盗掘された)か、そしてそれらが直ちに市場に出回り、収蔵家のもとに収められたかが、こうした青銅器著録の公刊の様子からもうかがえよう。本稿

が集成したのは、実はそのほとんどがこうした著録所載の盗掘品に属するものである。それ故、データにはさまざまな点で明らかでない部分が多いし、一見揃っているデータでも信頼がおけないという場合もあろう。一件一件について見ていくと、不審な点はいろいろと浮かび上がってくる。今回の検討によって判明したのは、『殷周金文集成』が示す出土データが必ずしも当てにならない

ということである。例えば、『殷周金文集成』に至って初めて「洛陽出土」とのデータが付された器は21件ある。そのうち、図象銘ABC(C)を含む器は16件にのぼり、ほぼ8割弱にもなる。表1で敢えて特徴的な図象銘をABCDとして特に入れておいたのは、洛陽出土とされる根拠がどうやらその図象銘ABCの存在によるものらしいと考えられるからであり、そのことはこの数字にうかがえるであろう。例えば、dで挙げた貞松補上4—4の鼎は、集成以前の著録としては貞松補と三代があるのみであり、集成が掲げる拓本も三代の複製であって、器影も見られず、現在の所蔵も不明の器である。その器に対し集成は「1929年洛陽出土」とのデータを記す。しかし、このように情報の乏しい器について集成が新情報をどこから得られるというのであろうか。本器が図象銘Aを持つ器であること、まさにそれによったとしか考えようがない。こうした事例のほか、さまざまな著録からの引用の際の書式の不統一や引き損ない、出所不明のデータが、洛陽出土青銅器について見てみただけでも相当の数にのぼるのであって、遺憾ながら、信頼するに足るとは言えないことが明らかになった。こうしたことは、該書の信頼性を甚だしく低めるものである。『殷周金文集成』は、他の部分の利用についても、十分に注意を要するところであろう。

早い時期の著録で洛陽出土青銅器を最も多く載せるのは、羅振玉の『貞松堂集古遺文（正・補・続）』である。本書は、摹本と出土地点・収蔵などの情報が示され、器影はなく、不確かな情報も混じっていて必ずしも全幅の信頼をおき得るものではない。しかしながら、本書において、おそらくは出土からさし

て間がないうちに多くの洛陽出土器（計49件）の存在が記録され、第一に拠るべき資料が残されたことの意義は大変に大きいと言わねばならない。この羅振玉に次いで洛陽出土青銅器の情報を大量に残したのは容庚氏である。その編になる『善齋彝器図録』『頌齋吉金統録』は、極めて多数の洛陽出土青銅器を載せている（前者が24件、後者が37件）。容庚氏が、果たしてどこからそれらの情報を入手したのかは、もはやうかがい知ることにはできない。容氏は、早く羅振玉とも誼みを通じ、また若い時期から北平古物陳列所の鑑定委員として活躍しており、あるいはそうした事情に通じた人物と接触する機会も多かったのであろうか（曾憲通「容庚先生學術貢獻述評」『容庚選集』天津人民出版社、1994年）。いかなる青銅器がどこで発見されたかといったことに関する、言わば裏の情報は骨董商はよく知り、そして骨董商と馴染みのコレクターであれば情報に接することは多かったに相違ない。あるいはこうした文脈の中で引用するのは失礼にわたるかもしれないけれども、嘉納治兵衛氏の『白鶴翁閑話』（白鶴美術館、1963年）に、本稿にも関連する記事があるので、以下、引用させていただく。

世間にはいまだに住友家の支那銅器の蒐蔵が世界一だと考へてるものがある。確に大正年間迄は然うであつた。民国十五年（大正十五年）河南省洛陽郊外の唐陵発掘が始まつてからは、世界一はわたしの方にお鉢が廻つて来た。なぜ然ういふことになつたか。それには大阪平野町で支那美術品ばかりを扱つた浅野梅吉といふ豪傑が居たからだ。浅野がうちへ出入りしだしたのは、水晶の大飾玉を買うたのが最初だつた。ある日周古銅の卣（黒黍酒を盛る器、提梁と蓋がある）を持つて来た。水銀銅の麗しいものだ。

値が高いので引取るものがないが、うちに向かぬかといふ。わたしは明治三十年代に漢時代の素文鼎を買ふたきりで、古銅は大したものもないので関心を持たなんだが、浅野のいふところでは、洛陽の発掘で帝陵の副葬

品が続々現はれてくるが、これは世界的な美術品で放つて置けば全部アメリカへ渡つてしまふ、現に三点アメリカへ渡つた、日本のため日本に留めたいといふのだ。それは一大事だ、値はいくらでもよい、品物さへよければ全部引取らうといつた。そうしたら洛陽から飛行機で上海へ出し、船便で神戸に揚げて直ぐ御影の宅へせんぐり運んで来る。(11~12頁)

このようにして発掘品は世界の収蔵家のもとへと運ばれたのであった。その際、もとの出土地点に関する情報がどれほど収蔵家自身の関心を引き、書き留められ残されたかは、必ずしも期待の持てないところであろう。そうした点まで細かに書き留められた珍しい例がホワイトの『Bronze Culture of Ancient China』である。特に、骨董商が彼のところへ品物を持ち込んだ年や月にまで言及している点は、貴重である。しかし、こうした例はまさに希有と言うほかはなく、ほとんどの著録には望み得ない。また、先に名を挙げた羅振玉の『貞松堂集古遺文』にしても、実は不完全な情報しかその段階では得ていない。例えば、作冊大方鼎は現在では四件の存在が明らかであるけれども、『貞松堂集古遺文』では三件までしか載せず、四件目があることは知られていない。作冊大方鼎は、初出段階では洛陽の中の具体的な地点は示されなかったけれども、のちに、邙山馬坡であるとの情報が付け加えられた。この邙山馬坡からは令彝をはじめ大量の器が出土したとされており、それは先の章で述べたとおりである。しかし、どの器が明確にそうで、出土の時期はいつなのかということになると、その全容を述べた金文(青銅器)著録は実はない、と言わねばならない。研究者が、これらの器群に関心を持ち、集成して初めて大体のところは浮かんできた、ということなのである。上に名を出した羅振玉のもとにですら、十分に正確とは言えない情報しか伝わっていない。要は、正確な情報の伝達という点からは、戦前の金文著録には多くを望み得ない、と言わざるを得ないのである。

そうした中からも、とにかく零細な記述を集め、ひとまずの吟味をし、今後

の研究のための資料集成をここでは試みた。ようやく出発点（それも伝世品というごく一部について）が確保されたに過ぎない。洛陽出土伝世品青銅器については引き続き情報収集に努め、修正などを加えつつ、あらためて中味の検討に入りたい。

こうした作業には遺漏・不備が付き物であり⁽¹⁾、勿論、私自身の判断ミスもあり得よう。方法上のミスもあろう。また、公刊著作にはまだ載せられていない情報をお持ちの方もおられよう。ご批判・情報提供を心よりお願いし、とりあえずのこの初歩的な試み・作業を終えることとしたい⁽²⁾。

- 1 本稿のこうした課題に極めて密接に関連する内容を持つ以下の論文を見ることができなかったことを、心からの遺憾とする。

W.C.White; Chinese Bronze. Bulletin of the Royal Ontario Museum of Archaeology, No.8. 1929年

吳圭潔「洛陽古玩行史話」『河南文史資料』第9輯（年不明）

吳圭潔「解放前洛陽文物古迹盜損情況概述」『洛陽文史資料』第1輯（年不明）

- 2 本稿が成るにあたり、本稿のテーマの関係論文については、東京大学東洋文化研究所の吉開将人氏から極めて多くの有益なご教示を得た。特にここに記し、感謝を捧げたい。勿論、本文中、それらを十分に使いこなせず誤読や遺漏があればそれは全て竹内の責任である。また、金石に関する著録は、東京大学文学部並びに東洋文化研究所の所蔵のものを利用した。閲覧に際して便宜を図っていただいた方々にも感謝の意を表したい。

本稿は、平成9年度、文部省科学研究費奨励研究（A）による成果である。

関係主要著録類 一覧表（附 略號）

呂大臨『考古圖』一〇卷，1092年（自序）

考古図

劉喜海『長安獲古編』二卷，1840年前後（刻）

長安

吳式芬『攔古錄』二〇卷, 1850年前後(成)	攔古錄
吳式芬『攔古錄金文』三卷, 1850年前後(成), (1895年刊)	攔古
潘祖蔭『攀古樓彝器款識』二卷, 1872年	攀古
吳大澂『恆軒所見所藏吉金錄』1885年	恆軒
方濬益『綴遺齋彝器款識考釋』三〇卷, 1894年(成), (1935年刊)	綴遺
王國維『國朝金文著錄表』六卷, 1914年	國朝
鄒安『周金文存』六卷, 1915~21年	周存
柯昌濟『韓華閣集古錄跋尾』一五卷, 1916年前後(成), (1935年刊)	韓華
羅振玉『貞松堂集古遺文』一六卷, 1931年	貞松
羅振玉『貞松堂集古遺文補遺』三卷, 1931年	貞松補
王國維著·羅福頤校補『三代秦漢金文著錄表』八卷·補遺, 1931年	三代表
郭沫若『兩周金文辭大系』1932年	大系
郭沫若『金文叢考』1932年	叢考
容庚『頌齋吉金圖錄』1933年	頌齋
梅原末治『歐米蒐儲支那古銅精華』1933年	歐華
劉體智『善齋吉金錄』1934年	善齋金
嘉納治兵衛『白鶴吉金集』1934年	白鶴
羅振玉『貞松堂集古遺文續編』三卷, 1934年	貞松續
于省吾『雙劍詒吉金圖錄』二卷, 1934年(序)	雙劍金
郭沫若『兩周金文辭大系圖錄攷釋』1935年, 又, 增訂新版1957年	兩周
商承祚『十二家吉金圖錄』1935年	十二家
羅振玉『貞松堂吉金圖』三卷, 1935年	貞松圖
王辰『續殷文存』二卷, 1935年	續殷存
劉體智『小校經閣金文拓本』一八卷, 1935年(序)	小校
柯昌濟『金文分域編』1935年	分域編
黃濬『尊古齋所見吉金圖初集』四卷, 1936年	尊古
容庚『善齋彝器圖錄』1936年	善齋器
羅振玉『三代吉金文存』二〇卷, 1936年(序)	三代
柯昌濟『金文分域續編』1937年	分域續
容庚『頌齋吉金續錄』1938年	頌齋續
孫海波『河南吉金圖志叢稿』1939年	河南贗稿
容庚『商周彝器通考』1941年	通考
梁上椿『巖窟吉金圖錄』二卷, 1943年(序)	巖窟

- 嘉納治兵衛『白鶴吉金撰集』1951年 白鶴撰
- 陳仁壽『金匱論古初集』1952年 金匱
- 陳夢家『西周銅器斷代』(一)~(六), 考古學報第九冊, 1955年, 同第10冊, 同年, 同1956年第1~4期。又, 單刊本『金文論文選』第一, 1968年, 所收 斷代
- 于省吾『商周金文錄遺』1957年 錄遺
- 容庚・張維持『殷周青銅器通論』1958年 通論
- 國立故宮中央博物院聯合管理處編『故宮銅器圖錄』1958年 故宮
- 水野清一『殷周青銅器と玉』1959年 銅玉
- 梅原末治『日本蒐儲支那古銅精華』1959~64年 日華
- 陳夢家編・松丸道雄改編『殷周青銅器分類圖錄』1977年(オリジナルは中國科學院考古研究所編『美帝國主義劫掠的我國殷周青銅器集錄』1962年) 分類
- 上海博物館編『上海博物館藏青銅器』1964年 上海
- 巴納・張光裕編『中日歐美澳紐所見所拓所摹金文集編』1978年 中日
- 孫稚雛編『金文著錄簡目』1981年 簡目
- 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覽・一一』1984年 林綜覽一
- 中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』全一八冊 1984年~ 集成
- 國立故宮博物院編輯委員會編『商周青銅器盛器特展圖錄』1985年7月 器盛器
- 中國美術全集編輯委員會編『中國美術全集工藝美術編』 美術全集
- ④青銅器(上) 1985年
- ⑤青銅器(下) 1986年
- 上海博物館商周青銅器銘文選編寫組編『商周青銅器銘文選』全五冊 銘文選
- ① 商, 西周青銅器銘文 1986年8月
- ③ 商, 西周青銅器銘文釋文及注釋 1988年4月
- 中國歷史博物館編『中國歷史博物館藏法書大觀』(日本語版, 柳原書店刊)
- 第一卷 甲骨文 金文一 1994年
- 第二卷 金文二 1997年
- 國家文物局主編『中國文物精華大辭典 青銅卷』1995年 精華大辭典
- 艾蘭・李學勤『歐洲所藏中國青銅器遺珠』1995年 歐洲遺珠
- 國立歷史博物館編『國立歷史博物館館藏青銅器圖錄』1995年 國立歷博
- 中國青銅器全集編輯委員會編『中國青銅器全集』全十六卷 1996年~ 青銅器全集

- G. Ecke, The Eumorfopoulos Collection, Catalogue of the Chinese and
Corean Bronzes, Sculpture, Jades, Jewellery and Miscellaneous
Objects. Volume 1, 1929 Eumorfopoulos
- G. Ecke, Frühe Chinesische Bronzen aus der Sammlung Oscar Traut-
mann. 1939 使華
-
- G. Ecke, Sammlung Lochow, Chinesische Bronzen, I, II. 1943, 1944 Lochow
- C. F. Kelly and Chen Meng-jia, Chinese Bronzes from The Buckingh-
am Collection. 1946
- Muséé Cernuschi, La découverte de l'Asie. Paris 1954
- W. C. White, Bronze Culture of Ancient China. 1956 White 1956
- B. Karlgren, Bronzes in the Wessén Collection, Bulletin of Museum of Wessén
Far Eastern Antiquities, no 30. 1958
- Pope, Gettens, Cahill and Barnard, The Freer Chinese Bronzes, Vol.1.
1967 Freer 1967
- B. Karlgren, Jan Wirgin, Chinese Bronzes ; The Natanael Wessén
Collection. 1969
- H. Brinker, Bronzen aus dem Alten China. 1975~1976 Rietberg
- W. Thomas, Ancient Chinese Bronze Art, China House Gallery. 1991

表 洛陽から出土したと伝えられる伝世品青銅器一覧

a 単に洛陽出土というもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成 No.	簡目 No.	備考
爵	2	考古図5-10	“得於洛陽”(考古図)			
爵	図	考古図5-11	“得於洛陽”(考古図)	7648		
卣	65	長安1-17~18	“得之河南”(據古)“器出洛陽市”(綴遺)	5433	5038	
鼎	5	貞松2-28-1	“出于洛陽”(頌齋續)	2066	0624	
鼎	6	貞松2-31-1	“此器与罍且壬鼎同出雒陽”(貞松)	2121	0674	
鼎	7+図	貞松2-41-1	“出於洛陽”(雙劍金)	2324	0812	
殷	3+図	貞松4-35-1	洛陽出土(頌齋續)	3341	1823	
殷	4	貞松4-37-1	“出于洛陽”(頌齋續)	3349	1832	
殷	5	貞松4-39-3	“出于洛陽”(頌齋續)	3455	1921	
殷	6	貞松5-8-1	“出于洛陽”(頌齋續)	3585	2021	
尊	4	貞松7-8-4	“出于洛陽”(頌齋續)	5774	4260	
尊	4	貞松7-9-2	“出于洛陽”(頌齋續)	5759	4264	
尊	6	貞松7-12-1	“出土洛陽”(頌齋)	5863	4336	
卣	5+図D	貞松8-19-3	“洛陽出土”(善齋器)	5214	4851	
卣	25+図	貞松8-29-2	“洛陽出土”(善齋器)“伝河南洛陽馬坡”(集成)	5400	5002	
盤	16	貞松10-26-3	“所見簋四盤一匜一同出于洛陽”(善齋器)	10119	6139	
鼎	2	貞松補上4-2	“洛陽”(三代表)	1354	0262	偽銘→除外
方鼎	41+図	貞松補上13	“出于洛陽”(善齋器)	2763	1155	
鬲	2+図	貞松補上15-2	“伝洛陽出土”(三代表)	500	1245	
不明	図	貞松補上19-1	“出洛陽”(貞松補)	10509	1727	
殷	3+図A	貞松補上20-2	“与臣辰諸器同出洛陽”(善齋器)	3342	1825	
卣	存6	貞松補中9-1	“洛陽出土”(河南贗稿)	5254	4879	
觚	6+図	貞松補中19-2	“出於雒陽”(雙劍金)	7289	5705	
罍	2+図	貞松補中21-3	“与我作父己鼎同出於雒陽”(雙劍金)	6409	5986	
鐘	5	貞松補中31	“兄云洛陽出土”(金文分域編)	5	6344	
*鐘	5	集成6	“洛陽, 同出七件”(集成)	6		存疑
甗	8+図B	欧華2-100	“河南出土”(河南贗稿)“出土於洛陽”(通論)	924	1496	存疑
殷	2+図C	欧華2-119	“出于洛陽”(河南贗稿)	3423	1923	
尊	6	白鶴5	洛陽(集成)	5843	4339	除外
鼎	2	善齋金2-13	“出于洛陽”(頌齋續)	1465		

洛陽出土伝世品青銅器研究 (一)

鼎	2 + 囙	善齋金 2 - 18	“出于洛陽” (頌齋續)	1550	0308	
鼎	4	善齋金 2 - 43	“出于洛陽” (頌齋續)	1927	0532	
尊	2	善齋金 4 - 62	“出于洛陽” (頌齋續)	5588	4138	
尊	4	善齋金 4 - 74	“出于洛陽” (頌齋續)	5773	4275	
觚	1	善齋金 5 - 8	“出于洛陽” (頌齋續)	6640	5456	
觚	1	善齋金 5 - 9	“出于洛陽” (頌齋續)	6641	5457	
觚	2	善齋金 5 - 22	“出于洛陽” (頌齋續)	7057	5511	
觚	7 + 囙	善齋金 5 - 45	“出于洛陽” (頌齋續)	7305	5708	
觶	囙	善齋金 5 - 52	“出于洛陽” (頌齋續)	6066	5734	
觶	2 + 囙	善齋金 5 - 77	“出于洛陽” (頌齋續)	6301	5906	
觶	6	善齋金 5 - 91	“出于洛陽” (頌齋續)	6479	6029	
爵	2 + 囙	善齋金 7 - 40	“出于洛陽” (頌齋續)	8451	3482	
段	囙	善齋金 8 - 5	“出于洛陽” (頌齋續)	2993	1574	
盤	2	善齋金 9 - 46	“出于洛陽” (頌齋續)	10036	6087	
匜	16	貞松統中 26 - 3	“所見簠四盤一匜一同出于洛陽” (善齋器)	10247	6235	
觶	8	貞松統中 37 - 2	“出于洛陽” (頌齋續)	6490	6042	
鼎	2 + 囙 A	小校 2 - 20 - 3	“河南洛陽” (集成)	1633	0362	存疑
爵	囙	小校 6 - 25 - 6	“出于洛陽” (頌齋續)	8159	3316	
鼎	2 + 囙 C	三代 2 - 46 - 8	洛陽 (集成)	2004	0594	存疑
方彝	6	三代 6 - 36 - 4	“榮子諸器, 伝洛陽出土” (分類)	09880	4520	
* 觶	8	頌齋續 80 (説明)	“伝出土於洛陽, 同銘的有二器” (通論)	6491	6042	
* 觶	8	頌齋續 80 (説明)	“伝出土於洛陽, 同銘的有二器” (通論)	6491	6042	
扁足鼎	無銘	河南贗稿 1	“洛陽出土” (河南贗稿)			
鼎	無銘	河南贗稿 2	“洛陽出土” (河南贗稿)			
甗	10	河南贗稿 9	“河南出土” (河南贗稿) “出土於洛陽” (通論)	(924)	(1496)	存疑
觶	2 + 囙	河南贗稿 39	“洛陽出土” (河南贗稿)	6256		
鼎	7 + 囙	白鶴撰 23	“河南省洛陽の出土と伝える” (日華)	2366	0835	
爵	4	金匱論古初集 p. 161~2	“河南洛陽” (金匱)	8885		
爵	4	金匱論古初集 p. 161~2	“河南洛陽” (金匱)	8886		
段	6	Musée Cernuschi Pl. X VIII	洛陽 (Wessén)			
尊	46	斷代 (二)p.79	“伝河南洛陽出土” (文物精華大辭典青銅卷)	6004	4448	除外

東洋文化研究所紀要 第138冊

卣	46	断代(二)p.79	“伝河南洛陽出土”(文物精華大辞典青銅卷)	5416	5023	除外
尊	2	White 1956 p. 109-1	洛陽(White 1956)	5511		
殷	2	White 1956 p. 109-2	洛陽(White 1956)			
觚	2	White 1956 p. 109-3	洛陽(White 1956)	6807		
觚	2	White 1956 p. 109-4	洛陽(White 1956)	6808		
爵	0	White 1956 p. 109-5	洛陽(White 1956)			
爵	0	White 1956 p. 109-6	洛陽(White 1956)			
觶	0	White 1956 p. 109-7	洛陽(White 1956)			
爵	0	White 1956 p. 110-8	洛陽(White 1956)			
爵	2	White 1956 p. 110-9	洛陽(White 1956)	7865		
鼎	0	White 1956 p. 110-10	洛陽(White 1956)			
鼎	2	殷周青銅器と玉器 66	“洛陽出土”(殷玉)	1319		除外
盤	6	中日7-719	“伝河南洛陽”(集成)	10069		除外
鼎	図D	集成1026	“洛陽”(集成)	1026		存疑
鼎	2+図C	集成2005	洛陽(集成)	2005		存疑
殷	2+図C	集成3422	“河南洛陽”(集成)	3422		存疑
觶	図A	集成6029	“洛陽”(集成)	6029		存疑
觚	3	集成7204	“洛陽”(集成)	7204		除外
爵	無	国立歴博41	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博43	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博44	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博44	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博44	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博44	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	2	国立歴博45	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博47	“洛陽出土”(国立歴博)			
爵	無	国立歴博48	“洛陽出土”(国立歴博)			

b 洛陽近郊の出土というもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成No.	簡目No.	備考
----	----	------	----------	-------	-------	----

洛陽出土伝世品青銅器研究 (一)

彝(?)	40+図	考古図4-44	“右得於洛郊”(考古図)			
鼎	3+図	三代2-40-3	Nähe von Loyang (使華)	1901	0517	

c 近年の洛陽出土というもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成 No	簡目 No	備考
殷	69	鄒華己 18	“近時出土洛陽”(鄒華)“兄云辛酉洛陽出土”(分域編)	4241	2544	
尊	7+図	湖社月刊第20冊	“洛陽新出土之品”(湖社月刊)	5892		
方彝	183+図	矢彝考釈(羅振玉)	“近年出洛陽”(貞松)	09901	4538	
鼎	1	貞松2-5-1	“此器近出雒陽”(貞松)	1229	0067	
鼎	9	貞松2-39-2	“此器近出雒陽”(貞松)	2365	0837	
方鼎	40+図	貞松3-25-2	“近出洛陽”(貞松補)“伝1929年出于河南洛陽邙山麓之馬坡”(断代)	2759	1150	
方鼎	40+図	貞松3-26-1	“近出洛陽”(貞松補)“伝1929年出于河南洛陽邙山麓之馬坡”(断代)	2760	1151	
方鼎	40+図	貞松3-26-2	“近出洛陽”(貞松補)“伝1929年出于河南洛陽邙山麓之馬坡”(断代)	2758	1152	
殷	図D	貞松4-24-2	“近年雒陽出土”(貞松)	2934	1555	
殷	図D	貞松4-24-3	“近年雒陽出土”(貞松)	2935	1556	
殷	図D	貞松4-24-4	“近年雒陽出土”(貞松)	2932	1554	
殷	5+図D	貞松4-41-2	“近出雒陽”(貞松)	3501	1958	
殷	5+図D	貞松4-41-3	“近出雒陽”(貞松)	3500	1957	
殷	6	貞松4-43-1	“近出雒陽”(貞松)	3567	1991	
殷	8+図	貞松4-44-3	“近出雒陽”(貞松)	3715	2119	
殷	8+図	貞松4-44-4	“近出雒陽”(貞松)	3714	2118	
殷	6	貞松5-8-1	“近出雒陽”(貞松)	3587	1996	
殷	6	貞松5-8-2	“近出雒陽”(貞松)	3586	1995	
殷	16	貞松5-22-1	“近出雒陽”(貞松)	3931	2261	
殷	16	貞松5-22-2	“近出雒陽”(貞松)	3933	2263	
殷	16	貞松5-22-3	“近出雒陽”(貞松)	3934	2264	
殷	106+図	貞松6-11	“近出雒陽”(貞松)	4300	2592	
殷	106+図	貞松6-12	“近出雒陽”(貞松)	4301	2592	
尊	21+図	貞松7-18-1	“近出雒陽”(貞松)	5985	4433	
尊	183+図	貞松7-19	“近出雒陽”(貞松)	6016	4463	
壘	図	貞松7-21-2	“近出洛陽”(貞松)	9761	5054	
卣	7+図D	貞松8-26-1	“近出雒陽”(貞松)	5311	4937	
觶	図	貞松9-10-3	“近出雒陽”(貞松)	6072	5723	

東洋文化研究所紀要 第138冊

觶	図D	貞松9-13-1	“近雒陽出土”(貞松)	6031	5751	
爵	図D	貞松9-32-1	“近出洛陽”(貞松)	7356	2979	
爵	図D	貞松9-32-2	“近出洛陽”(貞松)	7355	2978	
爵	2+図D	貞松10-14-3	“近出洛陽”(貞松)	8331	3650	
爵	2+図D	貞松10-14-4	“近出洛陽”(貞松)	8332	3649	
爵	2+図C	貞松10-18-2	“右二器近与辰父癸盃同出洛陽”(貞松)“洛陽馬坡”(集成)	8997	3790	
爵	2+図C	貞松10-18-3	“右二器近与辰父癸盃同出洛陽”(貞松)	8994	3787	
鼎	8	貞松補上9-1	“近出洛陽”(貞松補)	2331	0813	
鼎	8	貞松補上9-2	“近出洛陽”(貞松補)	2332	0814	
殷	5+図	貞松補上23-3	“近出洛陽”(貞松補)	3604	2117	
殷蓋	149	貞松補上29	“近出洛陽”(貞松補)	4330	2620	
卣	23+図	貞松補上34, 貞松統中22	“近出洛陽”(貞松補)	5396	5000	
爵	2	巖窟上66	“洛陽新出土”(巖窟)	7986		
卣	46	断代(一)p.157	“近年出土于河南(伝出于洛陽)”(断代)	5415	5022	
尊	46	断代(一)図版貳	“近年出土于河南(伝出于洛陽)”(断代)	6003	4447	
卣	65	断代(二)p.111	“解放前伝洛陽出土”(断代)	5432	5033	

d 出土年を明らかにしているもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成No.	簡目No.	備考
盃	45+図B'C'	貞松8-43	“案臣辰諸器民国十八年同出洛陽”(善齋器)	9454	4068	
鼎	2+図A	貞松補上4-4	“1929年洛陽出土”(集成)	1531	0303	除外
鼎	2+図	貞松補上5-1	“己巳出洛陽”(貞松補)	1601	0336	
鼎	2+図	貞松補上5-2	“己巳出洛陽”(貞松補)	1696	0337	
鼎	2+図C	貞松補上7-2	“己巳出洛陽”(貞松補)	2003	0593	
鼎	21+図	貞松補上11-1	“己巳出洛陽”(貞松補)	2659	1035	
甗	図	貞松補上17-1	“己巳出洛陽”(貞松補)	783	1401	
爵	図A	貞松補中23-1	“民国十七年出土于洛陽”(頌齋)	7353	2976	
卣	49+図B'C'	貞松統中23(金文叢考227)	“關於1929年冬,与矢令諸器同出於洛陽”(金文叢考)	5421	5028	
尊	37+図B'C'	白鶴4	“昭和4年の冬洛陽より出土したるもの”(白鶴)	5999	4443	
鼎	2+図BC	貞松図上16	“民国十七年洛陽出土”(通考)“1929年洛陽馬坡出土”(集成)	2135	0761	

洛陽出土伝世品青銅器研究 (一)

爵	図	巖窟上 29	“河南洛陽二十七年出土” (巖窟)	7507		
爵	2 + 図	巖窟上 35	“河南洛陽二十九年新出土” (巖窟)	8423		
* 爵	2 + 図	巖窟上 35 (説明)	“成对同坑出土茲録其一” (巖窟)			
爵	2 + 図 A	巖窟上 41	“河南洛陽二十八年新出土” (巖窟)	8385		
爵	2 + 図	中日 8-1029	“伝 1927 年前河南洛陽市” (集成)	8472		除外

e さらに詳細な出土地点を言うもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成 No.	簡目 No.	備考
殷	2 + 図 A	貞松 4-30-3	“伝洛陽馬坡出土” (集成)	3166	1684	存疑
卣	2 + 図 C	欧華 1-84	1929 年, 洛陽馬坡 (分類)	5153	4819	
殷	2 + 図 A	善齋金 8-18	“伝洛陽馬坡出土” (集成)	3167	1685	存疑
盤	2 + 図	善齋金 9-50	馬坡 (White 1956) “伝 1931 年洛陽馬坡” (集成)	10051	6100	
爵	2 + 図 C	貞松統下 17-2	“洛陽馬坡” (集成)	8996	3789	存疑
爵	2 + 図 C	貞松統下 17-3	“洛陽馬坡” (集成)	8995	3788	存疑
殷	3 + 図 A	続殷文存上 40-4	1929 年, 洛陽馬坡 (集成)	3306		存疑
卣	2 + 図 C'	十二家 尊 15~16	“約 1929 年, 洛陽馬坡” (集成)	5150	4820	存疑
鼎	2 + 図 BC	小校 2-39-1	“伝 1929 年洛陽馬坡出土” (分類)	2115	0670	存疑
尊	12	河南贖稿 38	“河南出土” (河南贖稿) “在洛陽馬坡出土的” (分類)	5959	4412	
卣	10	分類 A 612 R 325	“1929 年在洛陽馬坡出土的” (分類)	5359		
殷	2 + 図 A	Rietberg Fig.12 a	“伝洛陽馬坡出土” (集成)	3165		
鼎	2 + 図 BC	集成 2116	“伝 1929 年洛陽馬坡出土” (集成)	2116		存疑
卣	2 + 図 C'	集成 5149	“約 1929 年, 洛陽馬坡” (集成)	5149		存疑
卣	2 + 図 C	集成 5151	“約 1929 年, 洛陽馬坡” (集成)	5151		存疑
盤	図 B'C'	White 1956 p. 140-1	洛陽邙山 (White 1956)	10053		
盃	図 B'C'	White 1956 p. 140-2	洛陽邙山 (White 1956)	9380		
殷	図 BC	White 1956 p. 140-3	洛陽邙山 (White 1956)	3397		

東洋文化研究所紀要 第138冊

鼎	2 + 図 C	White 1956 p. 140-4	洛陽邙山 (White 1956)	2006		
卣	2 + 図 C'	White 1956 p. 140-5	洛陽邙山 (White 1956)	5152		
殷	32	貞松 5-40-2	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	4134	2450	
殷	32	貞松 5-41-1	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	4135	2451	
卣	5	兩周 録 37	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	5154	4822	
甗	3	兩周 録 37	“器出洛陽北十二里許之邙山廟溝, 其中有十四器” (兩周)	835	1424	
尊	5	三代 11-18-4	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
盃	4	White 1956 p. 119-1	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
尊	5	White 1956 p. 120-2	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	5796		
觚	0	White 1956 p. 120-4	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
觚	0	White 1956 p. 120-5	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
爵	2	White 1956 p. 120-6	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
爵	2	White 1956 p. 120-7	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
鬲	4	White 1956 p. 121-11	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	497		
鬲	4	White 1956 p. 121-12	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	498		
盤	3	White 1956 p. 121-13	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)	10049		
鼎	4	White 1956 p. 122-14	洛陽邙山廟溝 (馬溝) (White 1956)			
爵	2	集成 7881	“1926年河南洛陽市邙山苗溝” (集成)	7881		
觶	3	Lochow II p. 25~	河南省古洛陽府黃河南岸 (Lochow II)	6266		
卣	5	白鶴撰 24	“伝河南省洛陽郊外北窯鎮出土” (日華)	5160		
甗	6	文物資料叢刊 (三)p.45	1948年, 洛陽馬坡東北欄駕溝	884		

f 他の器との関連情報をもつもの

洛陽出土伝世品青銅器研究 (一)

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成 No.	簡目 No.	備考
尊	57	撫古三之一・六五	卣と対で洛陽から同出か (断代)	6009	4455	
殷	2	貞松統上 29-2	“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・卣・盃・尊・觚各一” (通考)	3128	1660	
卣	2	貞松統中 13-3	“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・卣・盃・尊・觚各一” (通考)	4853	4621	
盃	2	貞松統中 24-4	“同出洛陽同銘者尚有簋・盤・卣・盃・尊・觚各一” (通考)	9331	3987	
殷	1	貞松 4-26-2	“(出于洛陽)同銘者有遽簋” (頌齋續)	2972	1550	
犧尊	2+囟	貞松 7-5-3	“(出于洛陽)…遽父己犧尊…皆同出者也” (頌齋續)	5645	4190	
卣	2+囟	貞松 8-9-1	“(出于洛陽)…遽父己卣…皆同出者也” (頌齋續)	4959	4686	
觶	2+囟	貞松 9-18-1	“(出于洛陽)…父乙遽觶皆同出者也” (頌齋續)	6241	5861	
鼎	2	貞松統上 11-2	“(出于洛陽)又遽從鼎五器, …皆同出者也” (頌齋續)	1493	0238	
鼎	2	貞松統上 11-3	“(出于洛陽)又遽從鼎五器, …皆同出者也” (頌齋續)	1492	0239	
鼎	2	貞松統上 11-4	“(出于洛陽)又遽從鼎五器, …皆同出者也” (頌齋續)	1494	0240	
鬲	2	貞松統上 27-2	“(出于洛陽)…遽從鬲…皆同出者也” (頌齋續)	803	1416	
鼎	2	三代 2-14-6	“(出于洛陽)又遽從鼎五器, …皆同出者也” (頌齋續)	1495	0241	
鼎	2	三代 2-14-7	“(出于洛陽)又遽從鼎五器, …皆同出者也” (頌齋續)	1496	0242	
方鼎	40+囟	断代(三)p.84~5	“此鼎与令器同出” (断代)	2761	1153	

g 異説のあるもの

器種	字数	初出著録	出土に関する記事	集成 No.	簡目 No.	備考
爵	3+囟	攀古下 31	“此器与匜侯盃同出京師郊外” (綴遺) “河南洛陽市馬坡” (集成)	9000	3785	除外
鼎	2	貞松補上 6-1	“往歲出洛陽” (貞松補) “河南彰德出土” (三代表)	1287	0270	除外
不明	囟	貞松補上 19-2	“出洛陽” (貞松補) “河南彰德出土” (簡目)	10510	1726	除外
壺	3	白鶴撰 21	“安陽の出土” (日華) “伝河南洛陽市” (集成)	9519	5146	存疑

方彝	12	文物 62-1 p.56	洛陽市馬坡村南 (文物)洛陽市 孟津李家村 (張劍)	09888	4526	除外
----	----	--------------	-------------------------------	-------	------	----

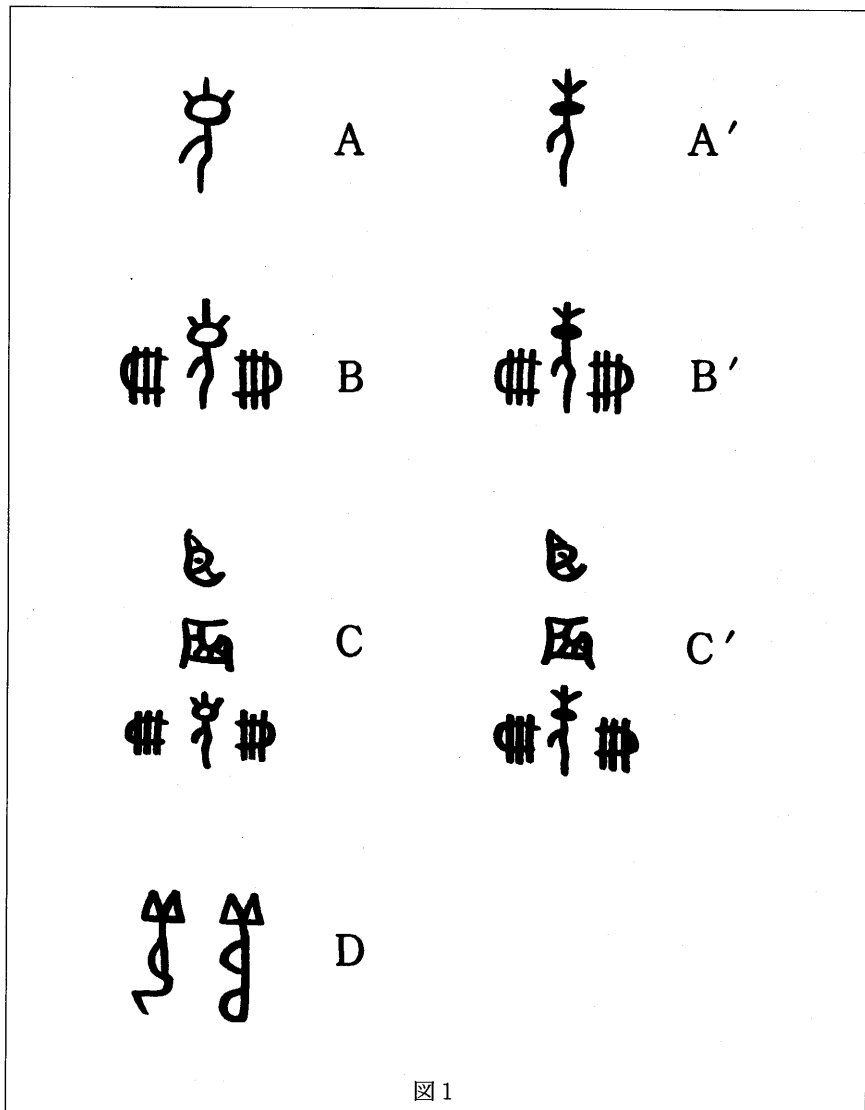


图 1